



314号
新宿発

ありがとう 澤田和子さん



この ひろい宇宙に
たったひとつの地球

その大きな地球に
たった一人のわたし
そして あなた

かけがえのない地球
かけがえのないわたし
かけがえのないあなただから

たいせつに たいせつに
あなたも しょう

わたしも
地球も

この ひろい宇宙に
たったひとつの地球

たった一度きりの人生だから
思い切り
のびやかに生きよう

だれもが だれをも
ふみしだくことなく
胸の奥まで深く息をし
ああ 生きていてよかったねと
ほほえみあえる地球にしよう

〈あごろ〉 人と人の出会うひろば
〈あごろ〉 人と人の共に生きるひろば

〈行く末を見すえて歩いた人〉 に想う

七月末、参議院の選挙で革新勢力が圧勝する六日前、澤田和子さんは旅立たれました。差別・偏見——、その結果としての「戦争」をこの世からなくしたい。——その一念で、東奔西走を続けていた和子さんが、旅の道程で出会った「長谷川テル」さん。以来、一身を挺して戦争を阻止しようとした「長谷川テル」と、ほとんど一身同体のような活動が続けた和子さんでした。

この追悼号は、「ひと筋に生きる日本の女性」を再考するすがにも……と願って、つくったわけではないのですが、はからずも、ひとつの問題提起になっていることに、改めて深い感慨を覚えています。

愛、やすらぎ、平和への道筋のなかで出会った〈あごろ〉を、どこか「似た者」としていつくしみ続けてくださった澤田さんのご不在は、はっきり穴があいたような思いです。参院選の革新圧勝にもかかわらず、またも「自民党のゆくえ」に光が集まっているいま、「見るべきものを見て」「見たら行動」という澤田さんのお声が聞こえてくるような気がしています。

いずれにしても、「思い」だけでは現世は変わらない。

行動の行きつく先に、「結果」を、きつちりと掲げていた、大阪生まれ、大阪育ちの澤田さんのお志が生きるよう、一步、一步を、しっかりと踏み締めて歩き続けましょう。（編集部）

ありがとう 澤田和子さん 「あぐら」 314号 目次

〈行く末を見ずえて歩いた人〉に想う

ご家族のアルバムから

和子さんを偲ぶ

平和を求め続けた「行動の人」

澤田和子さんの急逝を悼む

また一緒に旅をしましょう

評伝「長谷川テル」の出版——澤田和子さんの夢みのる

あなたの祈りとお心は、必ず次の世に引き継がれます

ありがとう 澤田和子さん

生き方を教えてくれた平和活動家 澤田さんに、ありがとう！

澤田さん、さようなら

澤田さん「ありがとう」

澤田さんの祈り

澤田和子さんを悼む

澤田和子さまを偲んで

澤田和子さんと私の出会い

〈あぐら〉と澤田和子さんとそして私たち

これからが本当のお付き合いをしたかったのに

たった一度のお見舞い

「心地よいお声」が、いまも

お志の深さを、あらためて受け継いで

最後の賀状

弔辞

もうすこしだけ

〈あぐらめいと〉はんなりと人を包みこむ澤田和子さん

編集部

長谷川 曉子

岩垂 弘

坂井 尚美

木田 登美

吉田 曠二

栗原 小巻

有元 幹明

木瀬 慶子

山際 美代子

西原 東洋子

森田 和子

西村 寿美子

服部 素

光川 澄子

高橋 ますみ

柳澤 つや子

芦澤 礼子

綿津 靖子

小俣 光子

福田 光子

斎藤 千代

澤田 和也

79 77 73 71 68 66 62 60 57 55 53 51 50 48 46 44 42 42 34 26 24 21 18 4 1



雑誌に掲載された 澤田さんの御作品から

蓮月さんと出会う……………	82
これからが大変！ 損保業務……………	84
地震と損害保険について……………	86
あごら213号を編集して……………	88
大阪市立婦人会館と自主グループ連絡協議会について……………	89
ハーグ市民国際平和会議……………	93
白井博子さん、お志を継ぎます……………	94
長谷川暁子さんとの出会いから……………	96
女性学・ジェンダー研究フォーラム……………	101
みんなで力を合わせ憲法九条を守ろう……………	102
あごら253号を編集して……………	103
住友電工裁判・判決に思う 裁判をする勇氣……………	104
長谷川テルを辿る中国の旅……………	106
ぐるーぶ紹介 戦争を許さない女たちのJ・R連絡会……………	115
キリスト教会のセクハラ・人権侵害裁判に関わって……………	116
憲法九条は世界の宝。多様な運動をつないで護り抜きたい……………	120
小雨の上海 霧の重慶……………	121
一人ひとりが小さな努力を——あごら300号に想う……………	127
日中友好と憲法九条——8・15中国青島大学にて……………	128
304号「希望の灯をともしよう」を読んで……………	129
「戦争の原体験」から 長谷川テルの顕彰に集中……………	130
軍縮問題資料 今こそ想い起こそう 長谷川テルの生き方……………	132

ご家族のアルバムから



澤田和子さん（撮影・澤田和也さん＝ご次男、フォトグラファー）



最愛の母、山形春子さんに抱かれて（1歳くらい）



三歳のお正月か、七五三の晴れ姿



1952年11月5日 13歳の中学生



小学校5年、10歳のお正月



1956年春 16歳の高校生



1958年5月3日 六甲山 18歳



1958年8月 和歌山 白浜にて

何をしてもうれしい 楽しい OL時代



1959年6月7日 19歳 この年 澤田祐榮氏と結婚



1994年2月26日 「望郷の星」上映会で、栗原小巻さん・長谷川暁子さんと



1999年2月 ハワイへ友人たちと



2001年3月広島で講演「闇を照らす閃光」長谷川テル

2児を育て上げると社会活動も活発に



2001年3月 9条連で「平和」を訴える



2002年
「第6回平和を訴える集い」で講演



2002年6月23日 講演風景



2002年8月25日 あごら30周年大会で（右から2人目）



2002年9月18日 長谷川テルを辿る旅 ジャムス市にある長谷川テル・劉仁のお墓での一行



世話人
澤田和子氏

2004年3月 9条連近畿の講演会で



2004年3月23日 重慶金剛坂頼家橋
郭沫若・長谷川テル・劉仁が使用した事務所にて



2004年3月23日 土井たか子さんと9条連近畿で記念撮影



2007年1月9日 家族と最後の記念写真

澤田和子さんを偲ぶ

和子さんを偲ぶ

長谷川 暁子

今年の夏休みに、私はまた中国東北の佳木斯市を訪ねました。収穫に臨む農作物の広びろとした畑に囲まれているこの辺地の晩夏が、爽やかで快適でした。郊外の四豊山麓にあるダムの湖が銀色の波紋を立て、風に靡いている松や柏の木々が柔和な歓声をあげて私たち一行を迎えてくれました。

私は広島中国放送報道制作局報道センターの取材グループの皆さんと共に、両親、劉仁・長谷川テルの足跡に沿って、上海、武漢、重慶、北京、ハルビンを歩んでから、二人の終焉の地、佳木斯に辿りつきました。

両親の合祀墓が微笑ましい日光を浴び、二つの巨大な白い花輪に覆われています。誰が置いてくれたかな、と、名前も書いていないそれを見て、ジーンと胸が熱くなりました。

墓の周囲もきれいでした。その日に案内して下さった市政府の幹部の話によると、市観光スポットに位置する両親の墓を掃除してくれる子どもや、お花を捧げてくれる観光者が年中絶えないとのことでした。

三、四年ごとにしか来られない親不孝の私は、せめて今日は、と心をこめて、石碑と墓を拭き、お花と日本のお菓子や重慶のお土産を奉ってから合掌しました。そして毎回のように、自分の生活や、仕事、娘と亡兄の子どもの近況、また前々に約束した「自伝」の原稿の進みなどを両親に報告しました。年をとるにつれ、「いい子になりたい」という気持ちが募りつつあって、親に喜んでもらう報告

ができるように、私は、日頃心がけて努力しております。

その後私は、澤田和子さんの御遺影と一束の可愛いお花を墓の前に並べて、もう一度合掌しました。「お父さん、お母さん、この方はもう天国に行かれましたの。彼女はある意味では私よりあなたたちにしつかりむすびついたと言える人なのですよ」と、私は囁きました。

和子さんのことを知っている人が大勢いらっしゃいます。彼女がああ戦争の時代に戦った長谷川テルに寄せて下さった貴い思いと、日本永世不再戦のためにゆるむことなく平和活動に取り組んでおられた実績は周知のことです。私には一番印象深かったのが、和子さんの寛容かつ温厚な気宇なのです。私は、若くとは言えない四十路にさしかかる頃、静かで清潔な環境の中で自由に呼吸できる生活を求めて、あえてことばもならわしもあまり知らない日本で暮らしていくことを選びました。それゆえに今までの十数年間、私は長谷川テルの遺児としての顔なるべく世間に出さず、ほぼ半隠居の生活をしてきました。姑息な自尊心のせいで、私は親の七光が嫌になつて、自分の力しか頼らずに、後半生を送ろうと、日本国籍を取得した日に心を決めました。

そんなわけで、和子さんが私に近づかれた最初の頃、私はほとんど消極的な態度をとっていました。長谷川テルに関する講演会や集いに参加してくれませんか、と彼女にたびたび誘われましたが、どうしても断り切れないとき以外、私はたいいてい避け、逃げました。

こんな私に、和子さんは終始熱心で親切でした。いや、むしろ寛容と言ったほうがふさわしいです。彼女はむりやりに説得や誘いを一度たりともしたことはなく、ひねくれた私の性格に対して示してくださったのは、温かい理解と広い包容ばかりでした。その温かい寛容に、私は深く感謝しております。かつての自分の態度には心残りがありますが、そばに私のいない和子さんが全身全霊を長谷川テルの

生涯語りに打ち込まれているそのお姿は、こよなく素晴らしくて美しかったと思っております。

今年の七月に出版された『長谷川テル』という本は、和子さんをはじめ有志の方がたが、長年にわたって続けられていた努力の結晶だと思います。この本を書くために、彼らは大量の文献と資料を集め、また二回も劉仁と長谷川テルの戦った足跡を辿ろうと、中国の南北を歩き回りました。その際、彼らに伴ってその目標が実現できるためのお役に立てたことは、今の私にとって、すこしばかりですが慰めになっております。

来年の二月に全国放送する予定のRCC報道局の番組製作も、和子さんの平和信念につながっているようです。平和活動の中で、彼女は同じ立派な志を持っておられるRCC中国放送のテレビディレクター・尾崎祈美子さんとめぐり会いました。尾崎さんは大学時代から戦争と平和問題やアジア諸国の文化・教育、また環境と女性問題などに強い関心を持ち、広島のある悲劇のようなことが二度と起こらないように、本職の報道業の力を最大限度に発揮し続けられている方です。二人は共通の志を、一つのドキュメンタリーの試みに託しました。

人の前で長谷川テルの遺児を演ずることが異常に苦手な私は、和子さんからそのご依頼を幾度となく受けましたが、「現地の取材のお世話と通訳の仕事なら協力しますよ」と、うやむやな返事だけでした。しかし八月十日、上海で取材グループの皆さんと合流した時から、私は大嫌いなビデオカメラの標的になりました。きびしい緊張の日々でした。それにしても、いやいやと思いつながら和子さんの魂に引つ張られたように、私はすこしずつ撮影の作業に入り込んでいきました。和子さんはご生前、一度私にこう言いました。「暁子さんしかできないことがあるんですよ」と。私は和子さんのお葬式に参列したとき、この言葉を思い出し、そして心の手帳に記しました。

中国の大地での取材は刺激的で、感動的で有意義でした。長谷川テルを通じて中日友好の強い願いを示した現地の人びとの情熱と、平和な暮らしを保とうと勤勉に働いている人たちのパワー、そしてそれを確実に有効に日本の人びとに伝えようと真剣にカメラを動かしている取材グループの皆さんの、心身とも輝いている御姿に、私は感銘を受け、胸を打たれ、多く学びました。

今、『長谷川テル』という本の中訳（中国語の翻訳）が『編集委員会』で検討され、テレビ番組の制作も続けられているようです。その本を読み、その番組を観てから、より多くの人が、心の美しい人間になるため、真の「美しい国」をつくるため、自分がどうすべきかを考えることが期待できるでしょう。

澤田和子さんは天国に行かれてしまいました。たぐさんのものを残してくれました。日本の人びとにだけではなく、海の彼岸にある中国の人たちにも。私はそれを大切に、今後もし中の架け橋の煉瓦の一つとして自分の役割を果たしていきたいと思っています。

（二〇〇七年の秋 同志社大学・神戸学院大学非常勤講師）

平和を求め続けた「行動の人」

岩垂 弘

類まれな「行動の人」だった。

私が、澤田和子さんに初めて会ったのは、一九九二年十一月一日だった。

このころ、私は新聞記者をしていたが、長谷川テルのことを調べていて、この日、大阪へ向かった。大阪在住の宝木武則氏にテルの話を聞くためだった。

宝木氏とはそれ以前から面識があった。宝木氏が加わっていた「反核産業人の会」の方がたと、おつきあいがあったからだ。その宝木氏がエスペランチストで、やはりエスペランチストであったテルの生涯に詳しいと、人づてに聞いて、出かけたのだった。

大阪では、大阪駅ビルにあるホテルで、宝木氏、テルの遺児の長谷川曉子（劉曉嵐）さんにお目にかかることができた。なんでも、宝木氏が長谷川曉子さんに住家を提供しているとのことだった。

その時、宝木氏、長谷川さんとともに現れたのが澤田さんと、弁護士坂井尚美氏。こうした出会いを通じて、私は澤田さんがテルの研究者であることを知った。女性史の研究者であることも。

その後、さまざまな経路を通じて、澤田さんの「長谷川テル」研究に向けての傾倒ぶりが伝わってきた。それは、まさに獅子奮迅というにふさわしかった。中国に渡ったテルがたどった足跡を求めて、何度も中国を訪問した。帰国後は、よく、はずんだ声で電話をかけてきた。

私が雑誌『軍縮問題資料』の編集に関わった一時期、澤田さんにテルについての一文を書いてもらった。それは「今こそ思い起こそう長谷川テルの生き方」のタイトルで、同誌297号（二〇〇五年八月）に載った。

そのかたわら、憲法擁護の活動にも奔走されていた。もっぱら九条連・近畿（憲法9条―世界へ未来へ 連絡会近畿）を舞台に活動されているようだった。九条連などが東京で開いた「9条フェスタ」

では、いつも会場に澤田さんの姿があった。

私に関わっている活動にも参加された。一九九五年に私が友人らとともに創設した「平和・協同ジャーナリスト基金」の活動だ。これは、「平和」と「協同」を推進するために、「平和」と「協同」に関し優れた作品を著したジャーナリストらに基金賞を贈って顕彰しようという市民運動で、今年で三年目を迎えた。

澤田さんは創設時から、この基金の運営委員を引き受けられ、会員の拡大、顕彰に値する候補作品の発掘に尽力された。

確か二〇〇三年か二〇〇四年だったと思う。澤田さんが中心の女性グループが、映像関係で基金賞を受賞した三人の女性ディレクターを、沖縄、広島、金沢から大阪に招いてシンポジウムを開いてくださったことがあった。澤田さんの情熱、行動力、バイタリティーに、いまさらながら驚嘆したことを覚えている。

長谷川テル研究、憲法擁護の活動、平和・協同ジャーナリスト基金での活動。これら三分野での活動に共通しているのは「平和」だ。澤田さんの、こうした「平和」への熱烈なこだわりが何に根ざしたものであったのか、私は知らない。澤田さんの口から聞く機会がなかったのが、かえすがえすも残念である。

活動の最中で、澤田さんは突然逝かれた。その後に残された「穴」はあまりにも大きく、深い。それを早急に埋めることが、私たちに求められている。

（平和・協同ジャーナリスト基金代表運営委員）

澤田和子さんの急逝を悼む

坂井 尚美

去る七月二三日、澤田さんが逝かれた。大阪の貴重な平和運動家の一人を亡くした。私にとっては、ここ二〇年来の親友を失い、残念の極みである。

澤田さんとは、私が世話人の一人であった大阪の有志弁護士のグループ「平和問題懇話会」に顔を出してもらったのが機縁であった。

一九八七年初めごろ、木下準一弁護士を通じて大阪被爆者の会の高木静子さんのご紹介によるものであった。以後、八九年ブリュッセル（ベルギー）で開かれた原爆国際法廷劇や九九年のハーグ世界市民平和会議にご一緒したことが強烈な印象として残っている。

しかしながら、何といっても澤田さんとのつき合いの深さは「長谷川テル」を通じてであった。一九九四年二月テルの遺児暁子さんと栗原小巻さんを招いた「望郷の星」上映会でトークの司会役を澤田さんから指名されたことからテルの偉大な足跡を辿ることにのめり込んだ。

暁子さんとの交流が始まったのもこの頃からだった。「あごろ」へのその後の投稿も澤田さんからのおすすめであった。

このたび、四名の分担執筆により出版の運びとなった「長谷川テル」も、澤田さんのアイデアと、執念が実を結んだものである。

五年前のテルを辿る中国の旅で佳木斯^{ジャムス}にあるテル夫妻の墓参が実現できたのも、澤田さんの企画に

よるものであった。

そして、三年前、澤田さん、暁子さん、木田日登美さんらと歩いた上海・重慶でのテルの旧居探しの旅あたりから澤田さんの出版意欲の高まりに追いまくられることになる。

澤田さんのすごさは、この本の末尾の蒐集資料の豊富さに表れている。

澤田さんは常々「楽しく平和運動を」を合言葉にされていた。七歳年上の私も、余生を澤田さんのあとに続けたいと念じている。ご冥福を心から祈るものである。

(二〇〇〇七年九月一七日記 弁護士・「平和問題懇話会」世話人)



『長谷川テル』から、
平和、勇気、信念を学びました。
遺児、長谷川暁子さんから、
愛、絆、希望を学びました。

栗原小巻

日中戦争の最中、中国に赴き、
傾けた本です。

日本の兵士に「戦わないで……」と呼びかけたテルの
心意気を、多くの資料に基
づいて明らかにしました。

¥1800

また一緒に旅をしましょう

木田日登美(坂手日登美)

「澤田さん、いま何処にいてる？」

私と貴女とが電話をする時、必ずといってよいほど「いま何処にいてる？話しできる？」という会話から始まりましたね。

貴女は日本中を飛び回って活動をしていたし、近年にはそれはアメリカやヨーロッパにまで広がっていましたからね。

そして私は一九九一年から二〇〇二年まで、一年の三分の二は中国の北京にいましたから、互いに連絡する時は、いつも「いま何処にいてる？」ということになったのです。

私たちが始めて出会ったのは一九八八年の夏でした。

その夏、大阪で取り組まれた「アメリカの日本への原爆投下は国際法に違反している」ということを、世界中の人びとに訴える活動に、貴女は大阪の「婦人の代表」として、私は大阪の「演劇人」のひとりとして参加していました。

その次の年、この活動が、国際司法裁判所のあるベルギーでも取り組まれることとなり、活動の中心となられた「大阪市原爆被害者の会婦人部」、「青年法律家協会」の方がたと共に、私と澤田さんは

サポーターとして参加し、初めての海外旅行を共にしました。

この初めての海外旅行は、いろいろとハプニングもありましたが大成功で、私と澤田さんにとって大きな収穫となり、それ以来たくさんさんの旅行を共にすることとなりました。

なんと言っても私にとって最大の収穫は、澤田さんという素晴らしい友人を得たことでした。

澤田さんは不思議な力のある人でした。理論的にどうこうと説明することはあまり無かったように思うのですが、彼女の物事に対する判断力と、実行力は本当に類稀（たぐひ）れでした。

例えば、私が地図を見て「どちらに行けば良いだろう、こちらも、あちらも行けそうだし、どちら間違つてそうだし？」などと、うじうじ迷っていると、彼女は必ず「こつちやで」と地図も見ないで決めるという具合でした。そしてまた、それが殆んど正解なのでした。

劉曉嵐さん（現・長谷川曉子さん）との出会いと、その後の澤田さんの活動を振り返ると、本当に人の出会いの不思議さを、思わずにはおれません。

一九八九年の夏ごろ、私はある私立大学で働いており、この大学に中国語の先生として来られた、劉曉嵐さんと知りあいました。

「劉先生のお母さんは、あの有名なエスペランチスト長谷川テルなのよ」と、職場の知人が教えてくれました。

長谷川テルという日本人の女性が優れたエスペランチストであり、「日中戦争下で反戦放送をした人」ということは知っていました。

その少し前から中国語の勉強を始めていた私は、中国に対する興味と中国語の勉強のため、中国生まれ、中国育ちだという劉曉嵐さんと、急速に親しくなりました。

それと共に、彼女のお母さんであるエスペランティスト長谷川テルに対する尊敬の念と、その生きざまを、もっと知りたいという思いがありました。その頃、長谷川テルの名前と、その素晴らしい生きざまを、まだほとんどの日本人は知りませんでした。

一九九一年八月の末、私と澤田さんと暁子さんの三人が初めて顔をあわせました。場所は大阪上本町の近鉄都ホテルのロビーでした。

私は暁子さんと澤田さんを引き合わせると、九月には中国語の勉強のため、北京に留学をしました。その後二〇〇二年まで、中国の北京に一年の三分の二は住んでおり、三分の一が日本で暮らすということをしていました。

私が北京に飛び立ってから、澤田さんの、長谷川テルの研究と、「テルの活動を、多くの日本人に知ってもらいたい」という活動は目覚ましいものがありました。

「長谷川テル研究」は澤田さんのライフワークとなってゆきました。後日、澤田さんは非常に率直に、「私は長谷川テルのことを知らなかった」と、いろんなところに書いたり、講演会などで話したりしました。その率直さが、聞く人の心にすなおに受け止められました。

彼女の遺稿となった、「日中戦争下で反戦放送をした日本女性『長谷川テル』」（長谷川テル編集委員会編）で、このように述べています。

「私は、大阪市立婦人会館で近代女性史を学んだが、その中には長谷川テルは出てこなかった。「何故だろう?」と思い、手元にある女性史の本を探したが見つからなかった。ようやく図書館で中国関係の本の中に紹介されていて、日本兵に向けた反戦放送をした人であること、エスぺラントで書かれた書物がたくさんあることもわかった。そしてこのビデオをたくさんの人に見て貰いたい、この素晴らしい女性を知って貰いたい、と私は走りだしていた」

「このビデオ」とは、一九八〇年（昭和五五年）に制作された日中合作のテレビドラマ「望郷の星」のことであり、主人公の長谷川テルを、劇団俳優座の女優、栗原小巻さんが演じておられます。長谷川テルとその夫、劉仁の、抗日、反戦、反ファシズムの戦いを描いたドラマです。

澤田さん、貴女は、出来る限りの力を尽くして「長谷川テル」を語る機会を作り、長谷川テルの、エスぺランチストとして国際的視野に立った、平和思想の素晴らしさ、彼女のエスぺラントによる作品の価値、また日本女性史の側面から、あの日中戦争の最中に、中国侵略のため中国大陸に送り込まれて来た日本兵に、日本の新聞やラジオから、「嬌声売国奴」と罵られても「ここにあなた方の敵はいません。貴重なあなたの血を流さないで下さい」と放送を続けた日本人女性としての価値を語り続けてきましたね。

あなたの長谷川テル研究はすこしずつ成果を挙げてゆきましたね。その活動は次第に多くの人たちに知られるようになってゆき、それと共に、あなたの集めた長谷川テルに関する資料は、数、量、質共に今では相当に評価されるべきものとなっていますね。

一九九三年、劉曉嵐さんは日本国籍を取得し、長谷川曉子さんとなりました。

一九九五年、澤田さんは初めて北京に来ました。私たちは、日中戦争の直接的なきっかけとなった盧溝橋事件の起こった場所、北京郊外の盧溝橋を訪ね、盧溝橋戦争記念館で、開戦当時のパノラマなどを見学しました。

二〇〇三年九月、澤田さんの企画、呼びかけで、坂井尚美弁護士を団長とする一九名の日本人が「テルの足跡をたどる」という、中国黒龍江省の佳木斯^{ジャムス}に眠る長谷川テルとその夫、劉仁の墓参の旅をしました。

この旅は、長谷川曉子さん、私のほか、「あごら」の斉藤千代さん、J R西労の田村委員長、「夕陽丘女性史研究会」の方がたなど、多彩な参加者で、澤田さんはテルと劉仁の比翼塚に、日本から持参した真っ赤なリングを供えられました。

テルの作品の中でも、私と澤田さんが特に好きな「失くした二つのリング」と言う詩を、しみじみと思いました。これは、一九三九年に重慶で病床にあったテルが、日本のお母さんのことを偲んで書いた作品です。

この旅に続き、二〇〇四年三月、テルの上海、重慶での足跡を訪ねる旅をしました。

長谷川テルは一九三八年一月から一九四五年の秋まで四川省重慶で、中国の有名な詩人、劇作家にして優れた政治家であった郭沫若をリーダーとする「文化工作委員会」というところに所属し、旺盛なエスプレッソによる文学活動をくりひろげています。

その「文化工作委員会」の事務所が、現在も重慶郊外の頼家橋という所に残っていました。

その事務所の前に一本の大きな銀杏の木が立っていました。

澤田さんは「大きな木やねえ。テルさんがここにいた頃にも、この木はここにあったのと違うかしら？」と言い、「ここで写真をとろうよ」と銀杏の木の前に立ちました。

その時わたしの頭の中に、突然一枚の写真が浮かびました。

それは一本の木の前にテルと劉仁が並んで立っている写真で、テルは髪を耳の辺りで切りそろえ、黒ぶちの眼鏡にワンピース姿、劉仁はかなりくたびれ背広姿で、二人の後ろに、まだ余り太くはない木が何本か写っています。それは、一九四一年、重慶で撮られたものです。

と同時に、北京にある郭沫若故居の庭にあるたくさんの銀杏の木のことも思い出しました。郭沫若は、新中国成立後、国家を代表して世界各国との友好交流につとめ、日中友好に大きな力を発揮しています。

何年前か、郭沫若故居の庭で開かれた「銀杏の木クラブ」主催の小さなパーティーに招待されたことがあります。主催者は郭沫若の娘・郭庶英さんでした。その時「この屋敷の庭に銀杏の木が多いのは、母の于立群がこの木を好きだったから」と語っていた庶英の言葉を思い出したのです。

「そうか、郭沫若夫人が銀杏の木を好きだったのは、彼女もこの重慶の銀杏の木のことを、北京の大きな屋敷に住むようになって、懐かしく思っていたからなのには違いない」と思い至ったのです。そのことをきっかけに、私は改めて北京の郭沫若紀念館（故居）に連絡をとり、郭沫若の末娘、郭平英さんとお会いすることとなりました。

二〇〇五年一月、澤田さんと共に上海で行なわれた「内山完造生誕一二〇周年」の記念行事に参加

したのち、二人で北京に向かい、郭沫若紀念館を訪問しました。

郭平英さんは「私たちの親は、日本と中国と世界の平和の為に命を賭し、手を取り合いファシズムと戦いました。その子供たちが手を取り合い、仲良くすることが出来るのは素晴らしいことです」と話されました。私と澤田さんはこの言葉に深い感動を覚えました。

これが契機となり、郭平英さんは今回の「長谷川テル」に、「随想、長谷川テルの作品を読む」という一文を寄せてくれています。

更にこの年の八月には、坂井尚美弁護士、澤田さん、私の三人は、「中国郭沫若研究会、郭沫若紀念館」の主催により、中国青島で開かれた「郭沫若と中国知識人、文化人たちの抗日戦争、民族解放戦争における文化選択」という国際シンポジウムに参加しています。この時の坂井先生の発言は、高い評価を受け、後に発行された『文化与抗戦』という論文集に収められています。

澤田さんは持ち前の社交性を發揮し、多くの人と交流を図っておられ、また、たくさんの写真を撮ってくれました。

いつも写真を撮るのは澤田さんで、不器用な私は彼女からたくさんの写真を貰うばかりで、とても有難く思っていました。

このように二人三脚、暁子さんとの三人四脚で、おおくの旅をして来ました。

長谷川暁子さんと三人の時は三人で一部屋、二人の時は二人一部屋でした。

暁子さんはとても茶目っ気のある人で、この三人のことを「三美女」と名づけ、三人で面白がつて

使っていました。

二〇〇五年の暮れに、澤田さんの提案で、奈良に一泊の小旅行をしました。

一二月の奈良は、とても静かでした。その夜も三人一部屋で、夜遅くまで語り合いました。

父母の顔も知らない暁子さん、父親と縁の薄かった澤田さん、二歳の時に実父と死別した私というような、それまで余り話し合うことの無かった、互いの決して幸せとは言えない自分たちの出自や、それゆえに味わった悲しみや苦しみなど、話の種は尽きませんでした。

しかし不思議に三人ともどこか能天気明るく、逞しく、一所懸命に生きてきたということも共通しているなあ、と思ったことでした。

澤田さん、貴女は逝ってしまわれました。

こんなの約束違反です。貴女とは「『長谷川テル』」が出版されたら、もう一度、テルさんのお墓のある佳木斯^{ジャムス}と一緒に「行こう」と約束していましたね。「それが終わったら暁子さんと一緒にチベットに新しく出来た鉄道で行こうね」と約束をしていましたよね。

二〇〇七年の三月に、「テルと劉仁の恋愛と結婚」という文を書くため、劉仁さんの故郷、遼寧省の瀋陽、本溪、橋頭、營口などを一人で周りました。

何日も、日本語を話す相手が有りませんでした。何時間も、じっと一人で、見知らぬ中国の人たちに混じって長距離バスに座っているとき、貴女と共に取り組んだ多くの仕事や、貴女が中国にいる私と日本に暮らす暁子さんとの接点となって三人で歩いてきた「長谷川テル研究」の様ざまなシーンを

思い起こさずにはおれませんでした。

一月末に貴女が倒れられ、意識不明のままでしたが、私はきつと良くなれると信じていましたから、この旅の収穫を貴女に報告したいと切実に思っていました。

私の願ひも、家族の方がたからの願ひもむなしく、澤田さん、貴女は逝ってしまわれました。でも私は心の中で、今も絶えず貴女と会話を交わしています。もしかしたら、貴女が生きていた時よりもたくさん、お喋りをしているかも知れません。

澤田さん、また一緒に旅をしましょう。

貴女は私の心の中に、これからもいつも一緒にいる友人です。私が旅に出るときは、貴女も一緒に行きましょう。
(二〇〇七年九月二〇日 ぼくだひとみ 演出家・中国演劇の翻訳・制作者)

評伝「長谷川テル」の出版

——澤田和子さんの夢みのる

吉田 曠二

(1) 澤田さんとの出会い

澤田和子さんと私はじめて出会ったのは今から四年前であつたと思う。

滋賀県近江八幡市で私どもが定期的に開催する中国近現代史の会で講演していただいたのが最初の機会であつた。「澤田さんの話をぜひ聞きたい」そう提案されたのは、私どもの会の事務局長、廣畑和子さんと、その講演会は廣畑和子さんと澤田和子さんの出会いの場でもあつた。会場で澤田さんが語る「長谷川テル」の話は熱弁で、会場のテーブルに座った二十名ほどの聴講者の気持ちに刺激し、雰囲気大きく盛り上げる内容だつた。澤田さんは栗原小巻さんが出演したテレビ・ドラマ「望郷の星」の話を切り口に、約一時間ほど戦時下の長谷川テルの活動について講演された。話が佳境に入り、日中戦争下の重慶で長谷川テルが反戦放送をしたくだりになると、澤田さんは涙を流して話をされたように記憶している。まるで澤田さんに長谷川テルの非戦の精神が乗り移つたような印象であつた。

それ以来、澤田さんとの交流がはじまり、澤田さんがレギュラーメンバーとして私どもが開催する中国近現代史の会に出席された。澤田さんの日常生活と仕事の拠点は大阪だから、滋賀県近江八幡市までは、JRの新快速電車にのつても六〇分以上かかる。しかも毎月一回、土曜か、または日曜日に私どもの会に参加され、質問や意見をのべられた情熱に感動した。また澤田さんは、オルガナイザーで、毎回、数名の友人を同伴して出席されたことも、われわれ主催者にとっては、会の仲間が増えることになり、大きな励みになつた。

澤田さんは現役のビジネス・ウーマンで、日常業務もあり、ずいぶん多忙な人であつた。それでも土曜か日曜日、わざわざ遠路大阪から、滋賀県にまで足をのびして参加してくださる。そのバイタリテイの源泉は、どこにあるのか？ いろいろ考えてみれば、澤田さんは長谷川テルが活動した中国の

政治とその国の歴史をしつかり学習したいという熱意から参加されたように思われる。

そのような関係で、毎月、澤田さんとお会いしている間に、私は二度も中国の旅を一緒に過ごす機会をもった。もちろん澤田さんには長谷川テルの評伝を書く目標があり、上海や重慶、さらにハルビンや佳木斯にも旅行されたが、重慶から上海に戻られた澤田さんと上海で落ち合い、上海の魯迅記念館を見学したことが印象深い。今から三年前の春のことで、そのときの体験談Ⅱ旅行記は、「闇を照らす閃光」の題名で、『あごろ』（大阪発296号）に掲載されている。その旅行記は、長谷川テルの足跡を、上海、重慶に偲ぶ、というものであった。

（2）長谷川テル研究会のメンバー

その旅から帰国した後のこと、澤田さんのお誘いをうけて、今度は私が、大阪で開かれる長谷川テルの研究会に参加することになった。その研究会は澤田さんの友人でもある弁護士坂井尚美先生の事務所で開催されている例会で、テル関連資料も坂井先生の事務所に整理され、ファイルに保管されていた。会にはすでに数名のメンバーがおられ、坂井先生をはじめ、演出家の木田日登美さんと長谷川テルの遺児、長谷川曉子さんの姿があった。その人びとが、これから長谷川テルの評伝を共同で執筆しようという話が盛り上がった矢先のことであった。その会に私がはじめて参加したのは確か昨年の冬であったと思う。その時からいよいよその出版計画が本格化し、メンバーの各自が研究するテーマを決めて、毎月例会を開いて、各自その成果を坂井弁護士の事務所で報告することにしたのである。今から振り返れば、その例会はたのしくもあり、懐かしさもこみあげてくる。共同執筆者は平和主

義を大事に考える弁護士坂井先生と澤田さん、それに長谷川テルの遺児、暁子さんと、木田日登美さん、それに私の五人であった。

その内の長谷川暁子さんは、戦後の内戦と動乱期の中国に残留し、中国で学校教育を受けられた人だから、中国語は万能で、資料として長谷川テルの中国語の論説を見つたり、その内容を翻訳することでは大きな力になっていた。また木田さんも、五十歳代で中国の大学に留学して、中国語をマスターされた女性で、自分でも中国語の資料に目を通すなど、いろいろ貢献された。

しかし、一冊の本にまとめるための草稿を各自が執筆するとなると、やはり苦難の連続であった。長谷川テルの生きた時代の日本と中国の戦争の歴史を詳しく知らなければ、戦争に反対した人物の伝記は書けない。仮に無理をして書いても、読書界で人様に読んでもらえるような内容には到達しない。その壁を打ち破るために、どうすればよいのか？　そのために各自それぞれ相当苦心される一幕があった。しかしその難関は、なにもこの会のメンバーだけのものではなく、人物伝を書くためには誰もが一度は、その壁にぶつかなければならない分厚い障壁であった。しかし澤田さんのバイタリテイが牽引力になり、長谷川テル研究会はほぼ毎月開催され、テルの生涯にわたる詳しい年譜なども作成された。

私はその熱意に心を動かされた。

(3) 澤田さんの遺稿…「長谷川テルの足跡」

やがて澤田さんは、自らの希望で長谷川テルの生涯をスケッチしたいと希望され、その草稿がまと

まっつてから、まず私の手元に郵送してこられた。彼女からは私に問題点を指摘して、アドバイスして欲しいとの手紙も添えられていた。その原稿が到着したのは、昨年（二〇〇六年）十二月の末であったように記憶する。ちょうど、冬休みで私は大学の講義がないので、正月休みにその原稿を読むことに没頭し、自分なりの印象と意見を原稿で指摘することにした。

正月が明けると、澤田さんから電話で「ぜひ感想を聞かせてもらいたいから、一度お会いしたい」と連絡があり、新春の一月二十六日にＪＲ大阪駅のグランビアでお会いすることになった。その日、お会いすると、澤田さんは、痛んだ足の関節もよくなり、「楽になりました」と言いながら、いつものようにお元氣な顔色であったように記憶する。ロビーでコーヒーをご馳走になり、会話がはずんだ。もちろん会話は長谷川テルの評伝をめぐる話題で、「その本の出版は今年七月下旬にしたい、本の表紙はグリーンにして、写真も沢山収録したいなど、あれもこれもと永年夢見た長谷川テルの評伝出版を今年こそ実現する夢を私に向かって披露された。

そのとき、私は持参した澤田さんの草稿をお返しし、改めて問題の箇所を数箇所、丁寧に指摘するなどして、もう一度全体をリライトされるようにアドバイスをしたことを覚えている。

しかし、それが澤田さんとの最後の会見になってしまった。その三日後の一月三十日、次男の澤田和也さんから、突然電話があり「昨夜、母が脳血栓で倒れ、病院に救急車で担ぎ込みましたが、意識不明のままです」との悲しい知らせであった。最初、私は耳を疑うほどの驚きを味わった。あのお元氣な澤田さんが、「まさか、三日前にお会いして、話をしたところでは何もその兆候すらなかったのに」私は気持ちが悪転して落ち着かなかった。

しかし息子の和也さんの電話では、「母は倒れる前日の日曜日、一人で会社の事務所にこもり、長

谷川テルの原稿をコンピューターで修正していました」とのことをうかがった。澤田さんは倒れる直前まで、長谷川テルと格闘し、会話し、その足跡を世の中に伝えようと努力し、その完成を目の前にしながら倒れた。その数日後、私は病院にお見舞いにかがって、澤田さんの枕元で「澤田さん、安心してください。あなたの原稿は活字にしますよ」と話しかけると、かすかに安心して瞼を動かされたように思われた。

それからおよそ五か月、澤田さんは病院で今度は病魔と格闘された。しかしご家族の介抱と回復の期待もむなく七月二三日夜、帰らぬ人になってしまわれた。

しかし評伝「長谷川テル」の刷り見本は告別式の前夜に製本され、その内の一冊が澤田さんの告別式の会場に展示された。その本こそ、澤田さんの後世への置き土産である。

(4) 今なぜ長谷川テルなのか？

世の中を眺めてみれば、今の日本政府はテロ防止を口実に戦争への道をひた走りに邁進しているように見受けられる。「武力を国際紛争の解決の手段としない」と日本国憲法に謳っているにもかかわらず、政権を担当する今の内閣指導者は、その平和主義を忘れて、再び危険なコースを選択しそうである。晩年の澤田さんは、日常、憲法9条を擁護することにも熱心で、長谷川テルの研究も、その延長線上に視点を据えて、テルの反戦の叫びを9条の上に重ねられたように思う。

それからもう一つの重要な課題が、日中の友好・平和の道の拡大であった。日中両国の間には、平和と友好を維持し、仲良く交流しましょうという、その理想のモデルを長谷川テルの実像にもとめて、

澤田さんは、テルの思想をクローズ・アップしようとしたのである。その澤田さんの精神と願いは、彼女が最後に執筆した草稿に記録されている。

今年、隣国中国はオリンピック・ブームで大きく盛り上がっている。オリンピックは国際的な平和とスポーツの祭典である。しかしその一方で、中国はいまなお台湾をめぐる政治情勢において不安定である。

今、日本人が中国問題で外交上注目し選択すべき道は、「政治的に中国が一つ」という考えであろう。戦時下の長谷川テルも同じ考えであつた。彼女は国共合作、つまり中国は一つという思想のもとで、反戦活動に邁進できたのである。しかし当時、日本政府は一つの中国を認めなかった。いわく「満州国」の分離独立、さらには華北政権の分離独立など。それらの分離政策は、口では独立の旗を掲げながら、心の中では、中国の独立を認めず、その領土を中国政府から次つぎに分離させることを画策するものであつた。

今、なぜ長谷川テルなのか？ 長谷川テルの現代的な価値は、彼女の反戦のメッセージが一つの中の土壌から生み出されたことを肝に銘じることだと思う。

台湾は中国の一部・一地方であり、国際社会の大多数の国がそのことを承認している。その原則を逸脱しなければ、アジアの将来に大きな国際紛争は起こらないであろう。

澤田さんが「なんとしても出版したい」と情熱を注がれた『長谷川テル』は、刊行後、直ぐにメディアに取り上げられた。私はメディアで永年生活した人間だから、新刊書の紹介には、「なぜ今、長谷川テルなのか」その主題をはずさずに、テルの反戦思想と現代の関係を紹介されるものと期待していたが、その期待は大きくはずされたままである。

(5) 今学びたい…民主統一戦線と反戦思想

歴史は繰り返す、とよくいわれるが、長谷川テルの反戦活動は国共合作路線が確立したとき、つまり中国が民族・民主抗日統一戦線の旗印のもとで、一つにまとまった条件のもとで可能になったのである。もしも中国が二つに分裂したままであれば、テルは、戦時下の重慶にも脱出できず、その反戦活動は不可能であつたはずである。

中国は一つという考え方、その流れは、今も継続し、強化されている。一九三七年、日中戦争が全面戦争に拡大したとき、中国の民主統一戦線が確立され、その統一された中国の力が日中戦争を勝利に導く要因になった。テルはそのことを充分認識して、反戦活動に邁進したのである。民主統一戦線の力がなぜ中国を勝利に導いたのか？ もうそろそろ日本のメディアもその歴史を認識すべきであろう。幸い今回の新刊書には、中国から郭沫若の娘の郭平英さんがすばらしい生き生きとしたメッセージを寄稿してくださり、父の郭沫若が民族統一戦線の中で活動できたこと、テルもまた同じ仲間で反戦活動に成功したことを強調された。

聞くとところによれば、来年の春、長谷川テルが日本のテレビ番組で放映される予定だという。願わくば、長谷川テルを中国の統一戦線の背景のなから浮き彫りにしてもらいたいと思う。「戦争は、いやだ、平和だ」とは、だれでも語れるスローガンである。しかし中国は一つだ、という思想を理解せず、むしろ中国からの台湾の分離に賛成するなら、反戦平和の叫びは浮きあがつてしまう。民主統一戦線と反戦平和、この二つは一つの思想であることをテルの活動が教えてくれる。

(九月一六日)

(よしだ ひろじ 名城大学大学院及び法学部非常勤講師 政治史担当)

あなたの祈りとお心は、

必ず次の世に引き継がれます

栗原 小巻

平和を祈り、婦人の人権運動にご熱心だった、澤田和子さん。

そのご悲報に、多くの方がたが涙しました。私もその一人です。

長谷川テルさんという、勇気と信念の女性への尊敬が、私たちの心を一つにしました。

長谷川テルさん、澤田和子さんの精神は、きっと次の世代に、引き継がれると信じています。

ありがとう澤田和子さん

有元 幹明

澤田さん、なぜそんなに早く逝ってしまったのですか。

私より三歳年下の貴女にお別れの言葉を送るなんて、世の中の不条理を恨みます。

私が貴女と出会ったのは森之宮の〈ピースおおさか〉で、「栗原小巻主演の日中合作映画『望郷の星』の上映会を行え」と、強く求められたときでしたね。〈ピースおおさか〉の事務局長をしていた私は、その迫力に圧倒され企画をたてましたが、「さあ、今から栗原小巻に会いに行こう」と、どんどん企

画をふくらませ、今日も参列されている長谷川テルの遺児暁子さんとの対談まで、すべて貴女の描かれたとおりのイベントを実施しましたね。

「平和花見」も貴女の提案で始め、今年は残念ながら貴女は来られませんでしたが一五年目も続けて実施しましたよ。オランダ・ハーグの世界平和会議への出席、中国の北の端佳木斯^{ジヤムス}の長谷川テルの墓参りの旅など、貴女の行動力に私たちはいつも感心するばかりでした。また、「平和運動は明るく元気にやらなくっちゃ」が口癖で、〈憲法九条を世界へ未来へ近畿連絡会〉の世話人として、わたしたちをぐいぐいと引つ張ってくれました。とうとう九条連の揃いの法被まで作って阿波踊りを踊って、徳島の町に平和をアピールしましたね。

私たちは、いつも平和の企画を提案される貴女のことを、「ピースプランナー」と言っていました、私たちのこれからの運動にとっては、大きな、大きな、痛手になってしまいました。

そして、本当に貴女のライフワークになってしまった長谷川テルの本が完成したのですよ。次男の和也君が貴女に見せていましたが、栗原小巻さんが推薦の言葉を書いてくれる立派な本ですよ。出版記念パーティをするのが楽しみでしたのに、残念でなりません。

私たちは貴女の遺志をしっかりと受け継ぎます。日本、アジア、世界の平和を求めることや、日本女性として日中戦争の最中に地下放送で反戦を訴えた長谷川テルを今に甦らせようとされたことなど、私たちが引き継いで参ります。どうぞ見守っていてください。

たくさんの素晴らしい思い出を作ってくれた澤田さん、これからも、いつも貴女を思い出しながら運動を続けていきます。ありがとうございました。安らかにお眠り下さい。 合掌

（憲法9条世界へ未来へ）近畿地方連絡会 世話人

生き方を教えてくれた平和活動家

澤田さんに、ありがとう！

木瀬 慶子

澤田さんと親しく話すようになったのは、『望郷の星』というビデオを借りたときからだと思う。
一九九六年ごろだった。

エスベラントという、世界共通の言葉があることを聞いたことはあったが、どんな言葉かは知らなかった。そのエスベランチストの長谷川テルという女性が、戦争中、中国大陆に侵略していた日本軍の兵士たちに向かって「銃を捨てる」よう呼びかけたということを、映像から私は、はじめて知った。衝撃だった。栗原小巻さんが演ずる長谷川テルの謙虚で勇氣ある行動に、感動した。

その感動を澤田さんに伝えると、私たちは、急に親しく話すようになった。

今から考えると、澤田さんは、長谷川テルを日本中に知らせるため、あらゆる機会を活用していた。私の編集していたミニコミ紙にさえ、余白があれば、『長谷川テル』のことを書かせて欲しいともちこみ、長谷川テルをテーマにした演劇が上演されると「宣伝してほしい」と依頼された。

「9条フェスタ2005」では、『望郷の星』を再上映し、昨年「9条フェスタ2006」では、足の手術直後の激痛をこらえ、『長谷川テルのパネル展』を中心になって企画した。

平和活動家として澤田さんの何十年も後を歩んできた私は、澤田さんに教えられ、長谷川テルと出会い、〈あごろ〉と出会った。そして澤田さんのたくさんの友人たちとも知り合うことができた。

連帯すること、手をつなぐこと、これをコーディネートするのが平和活動家であることをモットーとした澤田さんは、そのために、大阪でも、東京でも、情熱を注いだ。狭量な心の人たちによって様々な妨害をされても、澤田さんはあきらめなかった。どんなに事がうまくいなくても、その中で最善の努力をして、何かの芽をいつも育てていた。澤田さんこそ、「長谷川テル」の情熱を受け継いだ勇気ある平和活動家だと思う。

威張らず、情熱的に行動する澤田さんと最後に話したのは、一月中旬だったと思う。

「長谷川テル」の本を作るための原稿依頼が終わったこと、本ができた仲間たちと「大久野島」でのイベントを考えていること、「四月にはお花見もするから木瀬さんも来てよね。」——そんな長電話をして話したのが最後だった。

「平和運動は楽しく、持続可能にしないといけない」それが、澤田さんの平和運動の信念だった。まだまだ夢に向かっていた澤田さん。「長谷川テル」の本が、最後の仕事になってしまったが、熱い情熱で平和のネットワークをつむぎ続けた澤田さんの志は、いま、私たちの中に息づいている、と自負している。

いつもあきらめないで前に進むことを教えてくれた澤田さんに、人生の先輩に、心から感謝している。本当に、本当に、ありがとうございました。

（九条連）事務局

澤田さん、さようなら

山際 美代子

ここ一、二年、ゆっくり顔を合わせる機会が少なくなっていました。が、「澤田さん」と声をかければ、「ハイハイ。何？ どうしてんの？」と、あの丸い目をくりくりさせて、いつも応じてくれました。

今でも時どき、ふと電話のダイヤルを回したくなりますが、もうあなたは、風になってしまった。

あなたが倒れたと聞いて、とても衝撃を受けましたが、そのときのご家族の対応が早かったことも聞かされ、日頃の元気を思い浮かべ、やっぱり休養が必要だったのよ、しばらく休めばまた元どおり動き回れるわよ、と、気楽に思い直していた私。なかなか意識が戻って来ないと知り、不安になって病院に会いに行きましたが、目はぱっちり開いているのに、あなたは何も反応してくれなかった。

〈あこら大阪〉のメイトとして知り合いましたが、怠惰な一読者でしかなかった私は、あなたと行動を共にしたことは少なかった。近くに住みながら、あなたの活動ぶりは『あこら』誌上で知ることが多かったのです。でも、機会あるごとに連絡を下さり、他のメイトとの交流にも誘っていただいた。

阪神（淡路）大震災の時の特集号作成が、あなたと共にした私にとっての大仕事でした。多くの人脈を生かして動き回り、お膳立てをしてくださった。

またこんなこともありました。初期のころから持っていた「あごら」誌も、あなたの仲介で、新しくできた女性センターに寄贈することができました。

その前後の時期だったのでしょう。「在阪で働く女性たちの異業種交流の場を作ろう」と発案されました。最近でこそ、働く女の立場も徐々に理解されて、澁刺とした女性も多くなったようですが、大きな企業に属している人はともかく、たいていは、家庭と仕事場との往復で明け暮れています。仲間同士話し合う機会も少なく、異なった仕事をしている人たちとの交流の場はほとんどありません。「異業種交流」なんて大それた名づけですが、できるだけたくさんの人たちと知り合い、視野を広げようという呼びかけでした。初めて出あった人とでもすぐ友だちになれる澤田さんの、本領発揮でしたね。

主義主張にこだわらず、何でも話せる気持ちのよい会にしようと、「澤」をかけて「さわの会」と名づけました。大阪らしくおいしものを食べ、飲んで、わいわい喋れる楽しい会でした。若い人が多く、あなたもリラックスしながら企画を次つぎに立てていましたね。そのメンバーたちが、今回の世話をしてくれました。

仕事の現場を離れ、家庭の事情もあって、この会への出席も滞りがちになりましたが、催しごとのときは、必ず声をかけて下さった。ささやかな相談ごとでも、親身になって方策を考えて下さった。ありがたく思うと同時に、仕事や活動で多忙な身でありながら、面倒がらず常に細かい心くばりをするあなたに、いつも我が身を顧みたものです。あなたのお声がきけなくなったと自覚してからはや半年以上、私の心にもぼっかり穴が空いています。

折々に聞かせていただいていた「あごら」関連のニュース、とりわけ斎藤千代さんの健康を気にかけていましたね。まさかご自身が先に逝ってしまうなんて、考えてもみなかったことでしよう。

尊敬し慕ってやまなかった斎藤さんが、告別式であなたにお心のこもった話しかけをしてくださいました。あなたの人柄や、やって来られた活動の数かず、ご家族のことなど、くまなく伝えてくださった。あの場にいたすべての人に、どれほど深く浸透していったことでしょう。声なきあなたの面目躍如でした。よき先輩をもたれたあなたを、うらやましく思いました。感謝しつつ、でもあなたは、きつと恐縮していたに違いないと私は思っています。

(あごら大阪)

澤田さん「ありがとう」

西原 東洋子

澤田和子さんとの出会いは、二七年前。市の「婦人問題講座」(昭和五六年当時)で、初めて彼女の人柄にふれることができました。

二年間の講座修了後、夕陽丘女性史グループを結成して、今年二五周年を迎えました。

彼女は、頭の回転が早い理性的な人でした。自分の思想性や知識の蓄積、あるがままの個性を活かし、時代の要請に応えて、一歩先を、精一杯、前へ前へ進んで歩いている。そのさなかに突然、私たちの前から、いなくなりました。

つらい、悲しい別れでした。

共に学び、語り合い、絆を深め活動した二五年。彼女が、グループ活動を支えて果たした功績は、多大でした。メンバーたちも認めるところですが、彼女と分かち合った『喜怒哀楽』は、個々の感情で違います。

私個人は、彼女の「ありがとう、すみません、そうですか」の言葉に凝縮された彼女の、その時、その時の姿が鮮明に思い出されます。

子どもに戻って楽しんだ天神祭りの花火。

府の国防婦人会の掘り起こしボランティア「もう戦争、こりこり」と、人類永遠のテーマ「平和」を、決意あらたに取り組んだこと。

毎年、天神祭、終戦記念日に、「どてらい人間・たいした人・素敵な大人の女性」の彼女を偲び、思うでしょう。

私以外にも、彼女と出会い、心のふれあいで励まされた人は、多いと思います。「ありがとう」という言葉を、彼女も私たちに残された。私たちも「追悼号」に「ありがとう」という言葉を寄せたいと思います。

親愛なる、澤田和子様。

「仕事と・家庭と・社会活動」たいへんお疲れさまでした。
本当に「ありがとうございました」。

ゆっくり眠ってください。さようなら。

（平成一九年八月一五日〈夕陽丘女性グループ〉）

澤田さんの祈り

森田 和子

「なんとか目を覚まして！」というみんなの切なる願いも空しく、澤田さんを見送らねばならなかったあの日、澤田さんを惜しむ大勢の人たちが語る澤田さんの人生が、私などの想像をはるかに超えて広く深く真剣であったことを痛切に感じ、いかに自分が澤田さんのわずかな一面しか知らなかったかを知り、改めて残念で悔しい思いをかみしめました。

私たちの「さわの会」は、平成一二年、澤田さんの広い人脈に連なった異業種の女性六人から始まり、現在三〇余名の会員が持ち回りで、各自の専門分野の講話をする形式の勉強会を定期的に開催し、情報交換をおこなっています。誰でもいつでも自由に参加して、お互いに助け合うことを目的としている会風には、澤田さんの人柄が反映していると思います。

会の名称は、さわやかにネットワークしようという趣旨に由来していますが、みなが冗談に「さわだの会」というほど澤田さんを中心に会員が集まり、会の企画立案・実行・事務的雑用のすべてをほとんど一人で引き受けてくださっていました。

「さわの会」で知り合つて十数年、私が知っている澤田さんは、いつものんびりと自由で快活で、勉強会後の飲み会でも、よく食べて、よく飲み、「アハハハ」とよく笑い、家族や友人たちとの生活を自然体で楽しんでおられました。平和のための活動や女性問題などに取り組んでこられたことなどは知っていましたが、それらのことを声高に語ったりすることは決してありませんでした。

空疎で現実味のない理屈家を嫌い、日常生活を豊かに楽しく生きていくことで、「平和な社会」や「女性の幸せ」への祈りを体现させていた人なのだと思います。澤田さん、あなたを失った後でした。あなたの控えめで真摯な祈りを、《さわの会》の活動を通してあなたの冥福を祈りつつ、受け継いでいきたいと思っています。もつともつと一緒に時間をみんなで過ごしたかったけれど。

ありがとうございます。そして、さようなら。

（《さわの会》世話人）

澤田和子さんを悼む

西村 寿美子

澤田和子さんに初めて会ったときのことを、私は今でも鮮明に覚えています。

一九九四年二月、澤田さんが企画したピースおおさかでの「長谷川テル」の催しを前にしたある日、私がそこに参加を申し込んだ時にはすでに満員だったので、上映される予定のドラマ『望郷の星』だけでも見たいと思っ行って行き着いたのが澤田さんでした。

紹介してくださった方は「お忙しい方だから……」と言われたけど、電話に出られた澤田さんは、見も知らぬ私に丁寧に対応してくださり、その日のうちに「仕事で近くまで来たから」と、私の職場まで訪ねてきてくださいました。「名刺代わりに」と『あごら』を持って。

澤田さんは初対面の人とでもすぐに親しくなり、その時だけに終わらずお付き合いを続けながら、

人と人を繋げていく幅の広い人間性、気配りの細やかさ、やさしさがあり、私はいつも甘えさせていただきました。

澤田さんは、今何をしなければならないか、どんな形でやるか、企画力とバイタリティーにあふれていました。一人っ子で育ち、苦学生だったからでしょうか。

いかに運動を広げるかという問題意識は、幅広い豊富な活動から学ばれたのでしょうか。

モットーである「楽しい平和運動」は、長年続いた女性史研究会のリーダーとしての教訓だったのでしょうか。「商才があるらしい」とご自分で言いながら、会計が苦手な損をしてばかりだったし、他人にご馳走されたり品物をいただくことに潔癖でした。

それまで職場だけでの狭い世間の私は、澤田さんの紹介と後押しで、活動範囲を広げていくことができ、多くのことを学びました。

この十二年間の平和運動も、澤田さんを先輩同志として共に活動してきました。だから同じ時間を過ごしながらお互いに年を重ねていくものと思ひ、まさかこんな形で突然に失うとは思ひもありませんでした。今年一月二日、家族同士で食事をしたのがゆっくり話した最後になり、一月二九日に倒れました。完成間近の「長谷川テルの本」を、他の執筆者の方がたや澤田さんの息子さんが出版してくださいました。

私は入院中の澤田さんに代わって私にできることをしておこうと思ひ、九月二九日の9条フェスタに、澤田さんも世話人であった九条連・近畿として「長谷川テル」のワークショップを開くことを申し込みました。残念ながら澤田さんは旅立たれましたが、本の執筆者である坂井弁護士、テルさんの遺児・長谷川暁子さん、息子さんにも手伝っていただいて、精いっぱい実り多いワークショップを開

きたいと思っています。

澤田さんのいない空虚さは取り戻せないけど、出会いを作ってくれた「長谷川テル」との不思議な縁を大切にしながら、これから澤田さんの勇気や知恵に学んでいきたいと思っています。
〈星砂の会〉

澤田和子さまを偲んで

服部 素

昨年の秋、京都の小さい集まりに、長谷川テルを語りに来てくださったのが、お元気でお逢いした最後でした。

澤田さんの追悼の言葉を私が綴るなど、思いもかけないことになってしまいました。

倒れられた、と、ご子息からうかがったときのおどろき……。でも、きつと、またお元気になられることと信じていましたので、大阪の西村さんからご逝去のお電話を頂いたときには、ぼう然としてしまいました。

もう四半世紀に近いおつき合い——神戸YWCAで、ご一緒に「へいもづる」という、市民の眼で手繰り直す現代史勉強会をはじめたのがご縁でした。その後、私は京都に移りましたが、連絡をとり合っ、いつも積極的行動派の澤田さんに共鳴しながら引っぱって頂いておりました。

長谷川テルへの熱意は人一倍で、遺児暁子さんとは姉妹のよう。立命館国際平和ミュージアム・平和友の会での講演「私なりの平和への歩み」も、澤田さんのお口添えあつての成就でした。暁子さんの貫いてこられた生き方は、まさにテルの遺伝子！と思わされました。（あごろ）253号に講演録掲載（あごろ）入会をすすめて下さったのも澤田さんで、ご一緒に斎藤千代さんの〈ピースおおさか〉でのご講演をうかがったことも懐かしい思い出です。

暁子さんとは、テルの足跡を追って佳木斯^{ジャムス}へ、あるいは重慶へ、と旅をつづけられ、その報告記は、『あごろ』誌上で拝見することができました。

澤田さんの積極性は、ハーグ平和市民会議への参加、9条の会……と、ひろく平和に関わって展開されましたが、何といつても私の脳裏では、テル・暁子・和子という三角のボールがあつて、それぞれが確固とした主張を抱きつつ、二世代にわたって渾然と平和の塔を築いています。

立命館国際平和ミュージアムの「日本人の反戦運動」コーナーには、テル・劉仁の写真だけで何の解説もないので、私は「このコーナーはとても大事なところなのよ。戦争反対をとるは命がけだった時代に、この長谷川テルという人は……」と話しかけて、二つの祖国を持つ暁子さんに至る二代の歩みを熱く語り続けています。

先日心深く受け止めてくれた子の瞳が忘れられず、意識のない澤田さんに伝えられたら……と、とても残念でした。

平和をもたらす働きに心をつくされた澤田さん。今は安らかに天からお見守り下さい。（あごろ京都）

澤田和子さんと私の出会い

光川 澄子

私が生きてきた歳月の長さにくらべ、澤田さんとのご縁は短いものでした。でも真の出会いとは時間の長短ではなく、以前に読んだ言葉「人間は一生のうち逢うべき人にはかならず逢える。しかも、一瞬も早すぎず、一瞬も遅すぎない時に—— 森信三」を今あらためてかみしめています。

私が初めて澤田さんをお見かけしたのは、一九九九年一月、立命館大学国際平和ミュージアムで開かれた『望郷の星』上映と長谷川暁子さんのお話を聴く「平和学習会」に、服部 素様のご紹介で参加した時だったと思います。

この後日、あるとき、服部 素様が「こんな本が出ましたよ」と見せてくださったのが、「あごろ」253号『闇を照らす閃光』だったのです。

「あごろ」の名前すら知らなかった私は、エスペラントとは無縁の澤田さんが、長谷川テルにかけられている血を吐くような情熱に圧倒され、計り知れない衝撃を受けました。私もエスペラントに出会っていなければ、長谷川テルを今も知らなかったでしょうし、エスペランティストでも長谷川テルを知る人が年々少なくなっていましたから。

私はすぐこの冊子をエスペラント仲間に紹介しましたが、やはりほとんど知られていなかったようで、エスペランティストも競って購入しました。

二〇〇五年六月、京都で関西エスペラント大会が開かれることになり、私もたずさわった準備会で、番組の一つの日本語による公開講演会の講師をどなたにお願いするかという問題で、相談が行き詰まっていた。

その時です。面識もない私の口からなぜか、「澤田さんをお願いしてみてもいい」という言葉が出ていたのです。そして提案した責任上、私が依頼状を差し上げ、「講演者ではなく、〈語り部〉なら」と、ご快諾いただいたのが、ご縁の始まりでした。

以後、頻繁に連絡をいただくようになったある日、私の忘れていたテルの詩、『なくなった二つのリング』について熱く語られ、私が慌てて読み直してお返事をしたという一幕もありました。

私がエスペラント界について少しお知らせすると、早速、日本エスペラント学会、関西エスペラント連盟双方に入会され、テルに関する本その他を次々と購入されました。

そしてこの年の一月出版された小林司著『ザメンホフ』（エスペラント語の創案者）を、大阪本町の書店で偶然見つけられた澤田さんは、

「やはり、エスペラントをぬきにしては、真のテルは存在しなかったのですね。この本を読んで新たなテル像が浮かんできました。本当にエスペラントに出会えてよかった」と、感慨深げにしみじみと話されました。

この時私は、この一瞬が澤田さんと私の出会いの、まさに啐啄の機だと感じました。

いよいよ〈長谷川テルの語り部・澤田和子〉として、エスペラント界への第一歩となった関西エスペラント大会の当日。澤田さんは舞台へ上がられる直前に、教えて欲しいとメモされた「こんにちは」

のエスペラント語「サルートン」の挨拶で語り始められました。

貴重なフィルムの上映や、一語一語が心に染み入る木田日登美様の「なくなった二つのリング」の詩の朗読も挿入されたこの〈語り部〉の会は、年齢に関係なく来聴者一人ひとりの心に深い感銘と同時に、さまざまな問いかけを与えられて終わりました。

最後に再びエスペラント語で「ダンコン」（ありがとう）と挨拶された時には、澤田さんと長谷川テルが重なってみえた人も多かったのではないのでしょうか。

澤田さんからあらためて「平和」という言葉の真の重さを学ばせていただきました。本当に得難いご縁をいただき、有り難うございました。合掌

（京都エスペラント会会員）

〈あごろ〉と澤田和子さんとそして私たち

高橋 ますみ

『あごろ』は、女性たちの手によって出版され続けてきた、すばらしくて不思議な月刊誌。

創刊号からの編集者、斎藤千代さんを中心にして、全国各地のみならず、地球規模で読者たちが、うず巻きのようなネットワークを創りあげてきました。そして、すでに三五年になりました。私たち

会員読者たちは、『あごら』の読者であるというだけで、もう心をゆるし合い、本音で語り合うフェミニズムの同志です。

「主婦の壁の中」で、孤独をかこっていた私に、突然、あたたかい光を与えてくれたのは、〈あごら〉創刊号でした。

その当時、私は、子育てと義母の介護に忙殺され、孤独の壁の中の三十代。あれからもう三十余年がたっています。

当時、中日新聞で文化欄を担当していた母が、紙面で「フェミニズム」「女性たちの意識改革」「女性の自立」「能力の登録と開発」などが満載された〈あごら〉創刊号を紹介した後、私に手渡してくれました。

『あごら』の誌面は、私にとって新鮮で、まばゆいばかりのすてきなことばに満ちあふれていました。その後『あごら』を通して、北海道、仙台、北陸、関東、関西、京都、四国、北九州、沖縄と、私には、全国の〈あごら〉の会員と本音で語り合える、多くの友人を持つことができました。気がつけば、「主婦の壁の中の孤独」は、どこかへふっ飛んでしまいました。

東京の斎藤千代さんを中心に、大阪の澤田和子さん、福岡の福田光子さんなど、〈あごら〉各拠点の方がたとは、世間並みの挨拶を抜きにして、東京の〈あごら〉で出会ったり、真夜中まで電話で語り合う仲になりました。

とくに大阪の澤田和子さんとは、名古屋とは距離的にも一番近いこともあって、深夜の電話のおしやべりをよくしました。名古屋弁と大阪弁とが行きかう〈あごら〉談義です。

その和子さんがご入院と知り、会員の柳沢つや子さんと、大阪の病院へお見舞いにかがったのは、六月の終わり頃でした。

彼女は、お二人の息子さんの介護を受けて、静かにお休みになっておられました。

お声をかけても反応はなく、しばらくは、茫然として、おそばに突っ立っておりました。

回診のお医者様がいらしたので、心を残しながらも、おいとまをいたしました。

その折が、和子さんと私どもとの、今生のお別れになってしまいました。

斎藤千代さん、澤田和子さん、福田光子さん、そして名古屋の私たちは、気がつけば、ごく自然に〈あごろ〉の拠点の勝手連ネットワークを形成し、それぞれの地で、〈あごろ〉ゆえに多くの仲間を得て、女性問題の多様な課題を学び合い、問題の解消へと努力をさせていただくようになりました。

その昔、澤田和子さんのご紹介と推薦で、大阪の女性グループからのお招きをいただき、講演をさせていただく機会がありました。

その折、和子さんは、楽屋裏で私を励まし、集まってくださった方がたの状況も、事前に、こと細かに説明してくださいました。「〈あごろ〉の仲間は〈身内〉」と実感いたしました。

澤田和子さんの存在と実践力、そしてさりげない心づかい。そのうえ、まだまだ解決を必要とする女性の置かれている社会的な諸問題の解決にとっても、澤田さんは、非常に大切な存在でした。

私たちは、彼女の存在と実践力、女性たちの置かれている状況への鋭い洞察力などを、大切に受け継いでまいりたいと願っております。

お見送りのご葬儀の日、大阪をはじめ、全国各地から多くのご参加があり、ご活動の広さにも感嘆いたしました。

〈あごろ〉を代表して、弔辞を読まれた斎藤千代さん。その弔辞が素晴らしく、「非常にあたたかなお心がこもっていて感動した」と、ご参列の方がたからうかがいました。

柳沢つや子さんと私は、後の方の席でしたので、斎藤さんのお声を充分に聴きとれませんでした。ご参列の方がたのためにも、ぜひ、〈あごろ〉誌面にご掲載いただき、お悔やみの心を一つにして、和子さんのご冥福をお祈りしたいと存じます。

また、和子さんのお連れ合いからも、お二人のご子息さまからも、奥さまや、母上さまの思い出など、〈あごろ〉へご寄稿いただけたらと願っております。合掌
(〈あごろ東海〉責任者)

これからが本当のお付き合いをしたかったのに

柳澤 つや子

一〇年余り前、ヌエック（国立女性教育会館）のジェンダーフォーラムに参加した時、〈あごろ〉の夜の交流会で澤田和子さんとお会いし、隣同士になった。どんなお話をしたのかはもう私の記憶にはないが、斎藤千代さんが「あなたたちは姉妹みたいね」と何度も言われたことだけは、よく覚えて

いる。なぜそのようなことを言われたのか、その理由は簡単明瞭、体型と髪型がよく似ているということだけなのです。私にとつて澤田さんと斎藤さんはこの夜が初対面でした。翌日の池袋へ向う電車の中でも、やはり斎藤さんは「あなたたちは姉妹みたいね」と言われた。姉妹みたいねと言われても、私たちは腑に落ちなかったのですが、なぜか縁あつてそれからお付き合いをするようになった。澤田さんとの縁結びは斎藤さんであり、へあごろである。斎藤さんにはここから感謝しております。毎夏のヌエツクのジェンダーフォーラムに参加するようになり、七夕みたいに再会を楽しみにした。澤田さんの人なつっこい優しいお人柄は誰もが認め、いつでもまわりに人が集まり、肝っ玉お姉さんのようでした。ある夏、ジェンダーフォーラムのワークショップで住友三社の男女差別裁判を支援されていて、私もちょうど名古屋の岡谷鋼機の男女賃金差別を応援しており、私たちは意気投合して、次第に親しくなっていました。

澤田さんは裁判支援と同時進行で長谷川テルのことをライフワークとして研究を続けると言われた。しかしお忙しい中、名古屋で開催した〈あごろ二五周年の集い〉や向老学会にも参加して下さつて、本当に行動力のある勉強熱心な方でした。言うまでもなく差別をなくすこと、差別から派生する戦争を嫌い、心から平和を守ることを信念としておられた。

澤田さんのお元氣なお姿を見た最後は昨年八月二七日で、やはりヌエツクのジェンダーフォーラムに参加した時です。高橋ますみさんと私は向老学のワークショップをしたのですが、澤田さんとお友だちの宮崎さん、綿津さんが、準備から開催、後片付けと懸命に助けてくださいました。その前の七月三〇日の第七回日本向老学会学術総会にも参加してくださったのですが、三五度を越す猛暑にもかかわらず、前夜から名古屋入りをして参加してくださったのですが、気分が悪い、と言われて、午後

早めに帰られた。「向老学頑張つてな。来年も参加するし、私は長谷川テルのことを続けるから」と、体調が悪いにもかかわらず励ましをいただいた。一年もしないうちにお会いできなくなるなんて、思ひもよらなかった。

澤田さんと何度もお会いしても、いつも忙しくされていて、ゆつくりお話をすることはなかった。これからのこと、特に憲法9条を守りぬくこと、そして老後のことなど、いっぱいお話をしたかったです。これからが本当のお付き合いができるのではと思っていましたのに、とても残念でなりません。立派な「長谷川テルの本」ができて「おめでとうございます。尊い努力が報われましたね」と心から申し上げたいです。優しくて寄りかかっていたくなる澤田さんにもうお会いできないのは、心底さびしいです。「向老学頑張つてな」と言われたこと忘れず。今年も七月二十九日、第八回日本向老学会学術総会を無事終えることができました。向老学も、9条を守ることも、続けていきます。親しくしていただき、お世話になりました。ありがとうございます。出逢えたこと心より感謝申し上げます。

たった一度のお見舞い

芦澤 礼子

七月一五日、入院中の澤田和子さんのお見舞いに伺った。一月に脳内出血で倒れられたことを知って以来、ずっと「澤田さんのところに行かなければ」と思っていて、やっと実現することができた。

病院のロビーで、ご子息の澤田和也さんにお会いした。和也さんとは初対面だが、雰囲気がお母様にそっくりで、ひと目でわかった。以前私が〈あごら事務局〉に勤めていたころには澤田さんの経営する損害保険会社「芳泉企画」に、たびたびお電話する機会があり、お声には聞き覚えがあった。

そのとき澤田さんは一般病棟と特別病棟の中間のような位置づけの病室にいらした。病室の前で、私は一瞬躊躇した。ふつくらと優しい面立ちの澤田さんが、やつれていたらどうしよう。もう倒れられて半年近く経つのだから、もしかしたら……。

その心配は、お会いした瞬間に消えた。澤田さんは白髪が増えておられたとはいえ、頬はふつくらとして血色がよく、お元気なときとさほど変わらないように思えた。ただ、のどに人工呼吸器をつけ、大きく呼吸を繰り返しておられたのが辛そうに見えた。

「母の手を握ってやってください」と和也さんに言われるまま、そつと澤田さんの手をとった。手もやはりふつくらとして、温かった。「呼吸はもう、ほとんど自力でできるんですよ。全体的には少しずつ上向いてはいるんですが」と和也さん。

澤田さんは時どき、薄目を開けられる。「目は開けるんですけど、意識はないんです。何を見ているのかな……」

「今は参議院選挙真っ最中ですから、お母様がお元気なら、きっと選挙に飛び回っておられたでしょうね……」。

澤田さんの活動の根幹には、いつも「憲法九条を守る」という強い意志があった。今回の選挙も絶対に黙ってはおられなかっただろうと思う。

〈あごら大阪〉の世話人を長年担って下さった澤田さんは、「夕陽丘女性史グループ」や憲法九条関

係など市民運動にも幅広く関わっておられ、和也さんは運動関係の方がたとの対応にも忙殺されたという。加えて和也さんは、澤田さんの念願であった「長谷川テル」の単行本制作も引き継いでおられた。

「テルさんの本、もうすぐ出来上がるんですよね？」

「七月二八日くらいです。八月のエスペラント学会に間に合わせるつもりで」

「テルさんの本が出来たら、きつとお母様は意識が戻られるんじゃないかと思えますよ……絶対に本をご自分の目でご覧になりたいはずです。」

和也さんはお母様の仕事を完成させるために、苦手な本も読み、原稿をいただいた方がたとの連絡もととり、獅子奮迅の働きをされていた。

「長谷川テル」は、戦時中に中国に渡り、中国戦線で戦っている日本兵に向かって、ラジオを通じて戦いをやめるよう訴えたエスペランティストである。〈あごら〉では澤田さんが中心になって「長谷川テル」特集号を三回編集している。私は初めて特集を組んだ「闇を照らす閃光——長谷川テルと娘・暁子（253号）」の編集に〈あごら事務局〉として関わり、その縁で事務局を辞めたあとの二〇〇二年に澤田さんが企画した「長谷川テルを辿る中国の旅」にも参加させていただいた。

テルの娘・暁子さんと共に、テルと夫の劉仁氏が眠る佳木斯^{ジヤムス}の墓所を訪れたことは忘れられない。この旅行中、澤田さんは世話人として実に細かい気配りをされた。ハルビンから佳木斯^{ジヤムス}へ向かうバスがエンストして、数時間、代わりのバスを待っていたときも、北京に留学されていた木田日登美さん（劇団息吹 演出家）に、テルの詩「亡くした二つのリング」の朗読を頼むなど、場を盛り上げて下さった。あの数時間の間、参加者一九名は交流を深め、印象深いひとときとなったことを思い出す。

澤田さんの手を握りながら、さまざまな思いが胸をよぎった。長居をしてもご迷惑かと思い、小一

時間で失礼したが、まさか、それが最期のお別れになるとは夢にも思わなかった。

そろそろテルの本が出来上がっているはずだと、七月二八日に和也さんにお電話したら「母が二三日に亡くなりました」——しばらく受話器を握ったまま、何も言えなかった。お会いして一週間しか経っていないのに、少しずつ状況は上向いているはずだったのに……。ずしん、と心に大きな石が置かれたような気持ちになった。

しばらくして和也さんから、朝日新聞と読売新聞の大阪版に載った『長谷川テル』出版を紹介する記事が送られてきた。澤田さんの思いがここに結実したのだ。新聞記事を見つめながら、私は澤田さん亡きあと、初めて泣いた。

澤田さんが亡くなられてから、ひと月半が過ぎた。最近になってつくづく思う。もしあのときにお見舞いに行かれなかったら、私は病床の澤田さんには会えずじまいだったのか……。

思えば私が〈あごろ事務局〉在籍中の一九九五年から二〇〇一年までの五年半、澤田さんにはいろいろな面で鍛えていただいた。澤田さんは、大らかな面と細やかな面と、両方をお持ちの方だった。とかく気配りが足りなくなりがちだった私に、「もっと丁寧にと人に接しなければあかんよ」と、何度かやんわりと注意して下さったことは、今でも心に残っている。

澤田さんにはとてもお世話になりながら、何一つご恩返しできなかった。今、私が事務局として関わっている「平和・協同ジャーナリスト基金」の活動も、澤田さんから紹介していただいたものだ。澤田さんからいただいた大きな財産を、これからも大切にしていきたい。そして「もっと丁寧にと人に接しなければ」という澤田さんの言葉を、いつまでも心に刻んでいたい。

（元〈あごろ事務局〉）

「心地よいお声」が、いまも

綿津 靖子

「澤田です」。受話器から伝わってくる、凜としていて清々しいお声。

二〇〇四年初夏、大阪発あこら296号「闇を照らす閃光」のスタートです。確実に手渡したい、と、原稿を直接持参されるほどの意気込み。連日のように電話やファックスでのやりとりは続きました。その頃、BOCは、他に書籍二冊をかかえていて、少ないスタッフはもうアップアップの状態でしたが、近く訪中される予定の澤田和子さんに、刷り上がった『あこら』をなんとかお届けできました。朗読劇「売国奴と呼ばれても」が上演されたのは、その歳の暮れ（十二月三日）でした。名古屋にかけつけた私は、澤田さん、高橋ますみさん、柳沢つや子さんと一緒に観劇。「長谷川テル」をたくさんの方に知ってほしいと、その普及に意欲的な和子さんに、「澤田さんにはテルというライフワークがあつて羨ましい」と話すと、「ええやろ」と、ただにこにこ笑っておられました。宿の予約、そこへ自ら運転され案内してくださったつや子さんに対し、恐縮しきりの和子さんと私。湯船につかり、枕を並べ、楽しくおしゃべりしながら夜が更けていきました。

毎年八月には、埼玉県の武蔵嵐山で、独立行政法人・国立女性教育会館主催「女性学・ジェンダーフォーラム」に参加しておりました。興味深いワークショップへの参加、全国各地からの参加者との交流。そして「長谷川テル」の和子さん、「向老学」のますみさん、つや子さんにお会いできることが、

実は年一回の大きな楽しみになっておりました。焼けつくような日差し、蟬しぐれのなか、皆さんの役に立ちたくて、離れている研修棟と宿泊棟の往復さえ、私には心軽やかなことでした。

私は、あごら事務局に勤務しております間、嵐山の交流広場で本の販売を担当しました。忙しい合間をぬって手伝ってくださった和子さんから「新刊は定価で販売しなさい」とアドバイスをいただきました。いまでもその時の、お声とお顔を思い浮かべることができます。話されることの、一つひとつに説得力とメリハリをいつも感じておりました。

今年三月、お見舞いに伺ったとき、躊躇しているこちらに、ご子息の和也さんが呼んでくださり、勇気をだしておそばにまいりました。どうぞこの声を和子さんに届けて、と祈りを込めて耳元に話しかけました。入院されてから、すでに一月半が経っておりました。ご家族のご心労はいかばかりか。でも明るく応対される和也さんに救われる思いでした。

そして七月、「母が亡くなりました」と電話をいただき、続いて通夜のお知らせのファックスを拝受しました。身支度もそこそこに新幹線に飛び乗り、かけつけた時には、もうたくさんの人びとでいっぱいでした。こんなに大勢の方が悲しんでおられる。澤田さんってすごい。改めてそう思いました。

先日、手紙の整理をしましたところ、澤田さんからいただいた手紙が思いのほかたくさんありました。わずか五、六年のおつき合いの私でもこうですから、お親しい皆さまと和子さんのご親交の深さはどれほどでしょうか。

たくさんのことを和子さんから教わりました。でもそれは「言葉」で、というより和子さんの行動

を通して、という方が良いかもしれません。素早い行動、的確な仕事ぶり、相手の重荷にならないような心くばり、細やかな優しさなど、枚挙にいとまがありません。

「交通費さえいただければ、全国どこへでも行つて、『テル』のことを語ります」と話された和子さん。生涯を賭して「長谷川テル」の語り部としての情熱と使命感が伝わってまいりました。

（元〈あごら事務局〉）

お志の深さを、あらためて受け継いで

小俣 光子

私が澤田和子さんとお近づきになったのは、斎藤千代さんが、たまたま私の恩師に当たる方の後輩でいらつしやつて、そんなご縁で〈あごら〉事務局のお手伝いをするようになってからです。

煌星^{きらぼし}の如き〈あごら〉メイトのなかで、私が澤田さんに注目したのは、一九九九年長谷川テル研究の最初の論考「闇を照らす閃光」（〈あごら〉253号）でした。その号は「平和・協同ジャーナリスト基金」の賞を受賞され、テルの事跡をさらに世に広め、大きな反響を呼びました。

同じ頃、私はあるグループで日中戦争中に日本軍兵士から性暴力を受けた中国人女性を現地に訪ね

聞き取り調査をし、被害女性が日本政府に謝罪と賠償を求めた裁判を支援していました。

日本軍による無辜の中国人民に与えた残虐な行為の数かずを知り、打ちのめされていた私は、同じ日本人でありながら澤田さんの研究によって明らかにされたテルの勇気ある行動に深い感銘を受け、多くのことを学ばせていただきました。

その後、澤田さんとお電話ではしばしばお話をさせていただきましたが、お会いしたのは〈9条連〉が東京で開いた「9条フェスタ2005」の時間が初めてでした。澤田さんは、テルの事跡をテーマに講演をされ、斎藤さんがアシストの役を負われ、聴衆に大きな感動を与えました。

それを機に私は澤田さんと急速に親しくなりました。お互いの理解の深まりは澤田さんと親交のある岩垂弘氏が主宰される研究グループに私が所属していたことも関わっていたようです。

多忙を極める澤田さんが〈あごら〉に連載中の私の拙文を熱心に目を通してくださったのも、その頃でした。同じフィールドで愚直に格闘している私に共感してくださったのでしょうか、「今度の訪中で残ったから」と、人民元紙幣をさりげなく同封したお手紙をいただいたこともありました。

〈あごら大阪〉で「長谷川テル」をはじめ数多くの特集を組んで『あごら』の誌面を飾り、住友三社の男女差別裁判の支援、さらに〈九条連近畿〉での護憲活動など、「平和」を希求する澤田さんの活動は、澤田さんの飾りけのないお人柄を慕う人びとの力を結集して、しなやかに、したたかに、「楽しく」展開されました。

そのような東奔西走のなかにあっても、澤田さんは、〈あごら〉のこと、斎藤さんのことを常にお心にかけて、助力を惜しませんでした。後になって歴代の〈あごら〉スタッフの相談ごとにも一手

に引き受けてこられたということも知りました。

今年の一月二七日、澤田さんのご紹介で幾度か『あごろ』にご寄稿をいただいた、滋賀県ご在住の吉田曠二先生に、私は一ツ橋の学士会館でお目にかかりました。その折、吉田先生は、前日に大阪で澤田さんに会われたこと、澤田さんが『長谷川テル』の上梓に励んでおられるご様子を、お伝えくださいました。澤田さんはいよいよ正念場を迎えておられるのだと私は胸の打ちふるえる思いで、そのお話をうかがいました。思いもかけず、その直後の二九日に澤田さんはお倒れになられたのでした。

告別式の日『本が出来ました』と、ご子息の和也さんに案内され、式場入口に飾られた『長谷川テル』を拝見しました。まさにいのちを賭してお作品、胸に迫りました。

ワインレッドのスーツをお召しになった澤田さんのご遺影は、おだやかにほえみかけてくださいました。澤田さんを慕う大勢の人びとで式場はあふれました。

『長谷川テル』を世に送り出してから、ゆつくり『あごろ』の今後について話し合うお約束は叶いませんでしたが、斎藤さん、名編集者として『あごろ大阪』で活躍された山際美代子さん、『あごろ東海』の高橋ますみさんと一緒に、最後のお別れまでさせていただいたことは、「あんじょう頼みますよ」との澤田さんのおはからいであつたのでしょうか。

『あごろ』のゆくべき道を拓き、『あごろ』のこれからに最後まで心をつくされた澤田さん。

ありがとうございます。澤田さんのお志は、これからも『あごろ』の方位を指し示し続けてくださいます。それを受け継いでゆく私たちを、どうかお見守り下さい。

(あごろ事務局)

最後の賀状

福田 光子

毎年いただく澤田さんからの賀状を私は心待ちするようになっていました。干支えとの動物たちを額ぶちの枠に仕立てた賀状から、元氣いっぱい年明けのメッセージが躍り出てくるように、その年、その年の、「長谷川テル」の語り部としての思い、「長谷川テルを辿る旅」の企画と、新春発行の『あごろ』掲載の予告など、氣配りの澤田さんらしさが、そのまま伝わって参ります。

ところが、この年二〇〇七年の賀状は、いつもと違う澤田さんが映し出され、「関節の手術と長い入院、そして心身共に疲れ果て」と、常の澤田さんらしからぬメソメソした文面に驚き、私は、いささかの不安を募らせながらも「今年は元氣で、永年の共同研究『長谷川テル評伝』の完成に向けて……」という決意表明が添えられているのに安堵して、変わらぬ「長谷川テル」への傾倒に、何はともあれ、澤田さんは健在なのだと、春になったら励ましを込めたハートメールを送ろうと思っていたのですが、もう私の声は届かない彼方に旅立たれてしまわれました。

あの元氣な澤田さんは、もう居ない。斎藤千代さんからの訃報のお電話以来、衝撃を引きずっています。

大阪と福岡。澤田さんとわたしの距離は東京よりは近かった筈なのに、やはり眼が東京にしか向いていなかったのか、お互いの、行ったり来たりが無かったことが悔やまれます。

〈あごろ〉の先行きを案じて何度か深夜に電話をいただいたり、長い手紙も届いたりしながら、向

き合つて語る機会は多くありませんでした。しかし今、澤田さんを失つた喪失の悲しみは深く大きく、かけがえのない人を失つた事実を、にわかに受け容れ難いのです。

〈あごろ〉発足当初からの会員として私どもが歩き始めた頃は、北は北海道から西は九州まで、会員も皆若く、元気で、論客も多彩。長い髪を後にかき上げながらフェミニズムを論じ、〈あごろ〉の運営に意見を述べる仕種が今も眼の底に残る、全国会議の光景がありました。七〇年代を背景とした〈あごろ〉の原風景の一断面といえましょうか。雑誌「あごろ」は数少ない女の情報誌としてよく読まれ、例会でのテキストにも使われて、会員の数と雑誌の販路を拡げていった時代でした。

時の流れは小さな反転をくり返しながら、そこに浮かぶ変化の真相や因果の關係を見えにくくしてしまいがちです。会員の高齡化、活字離れ、メディアの変化、価値觀の多様化など、時の流れに見えかくれしつつ反転をくり返して時間が過ぎていくかと思われます。

会員の減少、何よりも財政の窮乏を、斎藤さんが身を削つて支える状況のなかに、澤田和子さんが大阪で名乗りを上げられ、最も頼もしい理解者の一人として斎藤千代さんを支えて来られたことは、紛れもない事実です。

〈あごろ〉の窮乏を知る者として、高見の見物席が座り心地のいいはずありません。名古屋の高橋ますみさん、大阪の澤田さん、私と、三角電話の相談で頭を寄せ合うことも、しばしばありました。

「創めがあれば終わりがあつたのです。幕を引くことも選択肢のひとつ……」と冷たく言い放つた私に、澤田さんは「でも、やるっきゃない」と言われて、ご自分の豊富な人脈をフル回転、大阪圏にとどまらず広島集會などでも「あごろ」を売り、また、「長谷川テル」特集で三度も自らの手で「あごろ」

の誌面を飾りました。

作ったものは売るしかない。経済人と運動家の両輪で夢を形にして走り続けた澤田さんは、ふり絞る気力をあふれる優しさで包んで振舞い続けた人でした。

そして。

澤田さんは私どもの歴史認識の一角に「長谷川テル」の存在を刻み、その成果は戦のない平和な世を求める人びとの道を照らしながら、長くその光茫を放ち続けると信じています。

ありがとうございます。澤田さん。

（あごら九州）責任者

弔辞

斎藤 千代

澤田さん。和子さん。

美しいお花に囲まれて、祭壇の下に静かに眠っていらつしやる和子さん。

私の声が聞こえますよね。

ゆうべ、横たわっていらつしやるあなたのお顔を、そっと撫でました。

あたたかい……と感じました。

そのとき、お口もとが動いたような気がしました。

いいの。もうそんなに気をつかわないで……。

働きすぎるほど働き続け、やさしすぎるほどやさしく、まわりを包みこんでくださった和子さん。長いご病気、大変でしたね。

でも、やつとお楽になられたのね。もうこれからは、ご自分ご自身をお大切になさってね。

ひざの治療をなさったあと、「痛みはすっかりとれたけど、この入院は、つらかった」と、珍しく「疲れた」とおっしゃるあなたに驚きながら、これでまた元気に、世界各地を飛び回ってくださる……と、とてもうれしかったですよ。それを、一人で旅立っておしまいになるとは……。

和子さん。あなたは、ある日、突然、「私は斎藤さんの娘よ」とおっしゃいましたね。

「娘……。それはちよつと年が合わない。妹ね。」と、驚いてお返事したこと、覚えていらっしゃいますよね。

妹。……私には血のつながる妹がいます。もちろん大切な妹ですけど、あなたが妹だなんて。なんとうれしいことを言ってくださったでしょう。本当の妹よりも、ずっとステキで大好きな和子さん。そう言えば、あなたは、いつも、いつも、本当の娘か妹のように、私を気づかせてくださった。

電話の声が、すこしかすれていると、「お風邪？」と心配してくださって、翌日は必ず小包が届いていました。中身は決まって、おいしい、おいしい、珍味の数かず。それも、どこか一軒のお店の……ではなく、あれやこれや、私の好物を、あの店、この店を回って揃えてくださった品じな……。

そのお心づかいに、いつも涙ぐんでいたのですよ。あなたのそんなお心づかいのおかげで、私は重い病氣を持ちながら、元気に働いています。

あれほどお世話になったあなたなのに、旅立とうとするあなたに、私は、なんのお力添えもできなかった……。ごめんなさいね。

それにしても、どうしてこんなに早く旅立ってしまったの。あなたは、やさしい、やさしい方だから、きつと、「これ以上、私の大切な人たちを疲れさせてはいけない」と、決心なさったのでしょうか。あなたが突然、意識不明になられてから、奇蹟を祈って、おつれあいも、お子さま方も、朝も昼も夜も、どれほどお心を尽くされたことか。——「ありがとう。もう、十分すぎるほど十分に尽くしていただいた。これからは、ご自分を大切に……」

いつもいさぎよい、あなたらしいご決断だったのでは……という気がしてなりません。でも、遠い国に旅立たれたあなたは、あの大好きな長谷川テルさんと、そして、「轟夕起子トウキョウキコそっくり」と、いつも讃えていらしたお美しいお母様と、これからは長い生涯を共になさるのですね。朝も昼も夜も、お心やすらかにのんびりゆっくり、楽しくお過ごしになってね。

あなたは忙しすぎた。ご自分の会社の経営だけでも大変だったでしょうに、テルさんの研究、反戦・平和、差別撤廃、女性運動……。時には海の外、ハーグやニューヨークにまでいらつしやった。もちろん中国には、テルさんを訪ねて、私が知っているだけでも二度もいらつしやった。おかげで私も、佳木斯シムキの丘で、劉仁ご夫妻のお墓参りができました。ありがとうございます。

そんなあなたのご活躍を支え続けてくださったおつれあいと、お二人のお子さん。ゆうべ、お通夜の席で、祐榮様の、いかにも大阪の男の方らしい深いお心に触れ、ああ、和子さんは、ほんとうにお幸せだったのだなと、しみじみ嬉しく思いました。

あなたは、周りの人びとに惜しみない愛を注いでくださったけれど、周りの人たちも、みんな、あなたが好きで好きで、大好きでした。目の前に、億というお金を積まれても、筋の通らないお金は一円も受けとらなかつたあなたは、「誠心・誠意」を人間にしたような方でした。その一方、財政難で苦しむ（あごろ）の窮地を救おうと、一計を立てた和子さん。結局失敗に終わった、あの珍談は、あなたのお傍に行く日まで、私の胸の「マル秘」にしておきます。

「運動は、平和運動でも女性運動でも楽しくなければ……」という、あなたのモットーも、ステキでした。あなたの笑顔、あなたのユーモアが、周りの人びとを、どんなに豊かにしたか……。『運動は楽しく』を、これからも、ずっと、私たち（あごろ）も、モットーにしつづけますね。

あなたとのご縁は、一九八一年。黒い表紙の「女と戦争」——特集あごろ24号がきっかけでした。企画をたててから一か月で刷り上げたあの特集は、ある意味で（あごろ）のシンボルでした。その核心に賛同して、八一年以来、あなたは（あごろ）の会員になられ、関わるすべての人の心をゆたかにしてくださいました。と一緒に編集した三冊の「長谷川テル特集」。一冊の書籍にまとめたと思ひめぐらしながら、実現できずにいましたのに、さすが大阪の皆様、りっぱなご本が出来ましたよね。よかった。これからの旅路の途中で、繰り返し、繰り返し、読んでください。

私も八十路に入りました。多分、遠からずおそばに行くでしょう。そのときはまた、夜を徹して、語り明かしましょう。生きることも、病むことも、旅立つことも、楽しく、おもしろく……。

あなたから頂いた、たくさんのお金を大切に、これからの一日一日を大切に生きます。

ありがとう和子さん。またお会いしましょうね。

ほんとうにありがとう。向こうで、待っていてください。

もうすこしだけ……

澤田 和也

本年二〇〇七年一月二九日、母が脳内出血で倒れ、意識不明という事態になった。

まだまだやり遂げなければいけないことがいっぱいあるのに。

そのひとつ、母の夢であった『長谷川テル』の共同執筆は、半年間、母が病魔と闘っているあいだに、本になり、七月二七日に出版されることになった。

ただ母は本が出版される四日前、七月二三日に他界してしまった。あと四日だったのに。

印刷も終わり、製本にかかっていたので、もう自分の手を加えるところは、なくなったということなのだろうか？

でも半年間、母はよくがんばってくれたと思う。今思うと、その期間、母は『長谷川テル』を完成させるために、私の背中をずっと押しつづけていてくれたと思う。そして他界してからも、落ち込みそうな私に、本の販売やいろいろなことなど、やらなければならぬ仕事をずっとあたえ続けてくれました。

『長谷川テル』が出版されるまで、この本が売れるかどうか不安であった私は、日に日にこの本に不思議な力を感じるようになりました。たぶんそれは母が今までやってきたことが認められ、そして母がその力をこの『長谷川テル』に与えてくれたのであろうと思います。

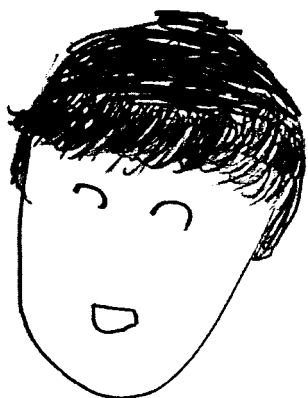
その一つは、大変ありがたいことに、読売新聞・朝日新聞に、この本の記事が大きく載ったことで

お孫さんが描いた
おばあさま

長男 澤田隆之氏のご子息



澤田将吾 (しょうご) 君
1997年10月23日生
小学4年生



澤田悠希 (ゆうき) 君
2000年8月7日生
小学1年生

す。新聞に載ってから順調に本は売れていった。そして母のライフワークであった長谷川テルという人物を広めるということが、かなりできたのでしよう。

ただ残念なことは、母がこの『長谷川テル』を手にとって、全国を講演しながら飛び回っている楽しそうな笑顔が見られなかったことです。もうすこしだけいいから長生きしてほしいかっと思ひます。今あなたは、あなたの愛した母、山形春子、そして長谷川テルや劉仁と楽しく話しながら、世界平和を祈って、友人の方がたや私たち家族を見守っているのでしょうか。

私を生んでくださったってから四一年間、今まで本当にありがとうございました。

あごろめいと

はんなりと 人を包みこむ

澤田和子さん

ずっと以前のことだが、ある人に、「あなたは大阪の人みたい」と言われてギョツとしたことがある。東京の人間にとつては、大阪人イコール「もうかりまつか」のイメージ……。うろたえていると、「これ、最高のホメことばよ」と注を頂いた。釈然としなかったが、この頃になつて、「大阪の人」の良さが、しみじみとわかる。

心の奥底のサービスピス精神、やさしさ。手間ひま惜しまない心配り。そして表と裏の差がない。

澤田和子さんとつきあえばつきあうほど、むかし聞いた「大阪の人」ということばが納得できる。

澤田さんが「あごろめ」に関わるようになったのは、八二年発行の「女と戦争」が動機だという。当時、ヘタ陽ヶ丘女性史グループで女性史を勉強中の澤田さん、「女と戦争」についての

リポート作成をしていて、資料を探しに訪れた紀伊國屋書店で「あごろめ」の「女と戦争」にめぐり会った。以来十三年のおつきあい。

「読むだけで少しもお役にたつていない」が、澤田さんの口ぐせだが、一冊出ることに細かな感想を寄せてくださる。「これは必要な情報」と思うと何十冊も買い込んで配り歩いてくださる。損害保険の代理店を開きながら、出版物を出したり、平和運動を続けたり、いつもマメに立ち働く澤田さんの人脈ネットワークは広い。

「私は楽天家、まあボチボチやつてます」を看板にしている澤田さんだが、義侠心のかたまり。義を見てせざるは勇なきなり。逃げたことはない。だから、いつも忙しい。夫婦でありながら、夫だけの配転はおかしいと、朝日火災の転勤問題の応援団に。ついに勝

訴した粘り腰もすこかった。

政治の問題にも、いつでも鋭いアンテナを張っているが、「得意先では政治の話は決してしない。政経分離」というバランス感覚の持ち主でもある。思わぬところで人を傷つけては……という、大阪人らしい心配りだろう。

十人集まれば考え方も十色、というのも、彼女の哲学になつていゝらしい。ある女性を私に紹介してくださった時のせりふ——「一緒に女性史をやつた仲間やけど、私たちのヘタ陽ヶ丘女性史グループにはあきたりなくて出



ていきはつたほどのお人よ」には恐れ入った。グループを去る人はとかく白眼視しがちだが、「自分のところでは満たされぬ人」と評価する。ふところの深さはナミの人では真似できない。

三十年近く働き続けたバキバキのキヤリアウーマン。一緒に仕事すると、その小気味よい仕事さばきに、いつも感心してしまうが、第一印象は、はんなりとやわらか。船場のご寮はんとはこういう方かな、と思つたりする。こ家庭の話はほとんど耳にしたことがないが、近所でも評判の奥さんであり、お母さんでもあるらしい。

〈あこら大阪〉は、責任者が何度かわつて、今は吉田悠子さん。引つ込みがちの彼女を陰ながら支えつつ、今度の「女住職……」の号は、むしろ先頭に立つてまとめてくださった。

最初に蓮月尼の原稿をお送りしたと

き、「正直言つて、わたし、こんな苦手です」と、電話の向こうで溜息をついておられた。ご母堂の仏事をめぐるしんどさ以来、仏教には、できるだけ近づかないことにしている……と。蓮月尼式の、直線型のたたかいかも彼女の体質とはなじまなかつたのだろう。

それでも、何度も何度も原稿を読み直し、大阪在住の〈あこらメイト〉たちにコピーを送り、連絡をとり、吹田市での講演会にまでこぎつけた。

近頃、ひと頃の勢いを失つた〈あこら大阪〉の輪をなんとか守つていこうという、大阪女らしい心づかいだったのでは、と思う。

どこのグループでも、ナンバー2が一番大事だが、この得がたいナンバー2を持つ〈あこら大阪〉に、また花が咲く日も、遠くはあるまい。(斎藤千代)

(あこら196号 1994年7月)

雑誌に掲載された御作品から

蓮月さんのお話を聞いて

蓮月さんと出会う

澤田 和子

昨年の暮れ、突然に、東京の事務局から、「大阪の方から原稿が届いたので（あごろ大阪）で三月号か四月号の編集を受け持つてもらえないだろうか」との連絡があつた。そして数日後、書類がどつさり届けられた。守口市在住の女性僧侶藤谷蓮月さんの手記「一向一揆のパワーを今一度！」と、それについての資料であつた。これを大阪のメンバーで読んで蓮月さんと座談会をし、まとめてもらえないかということだった。

「宗教と女性差別」は共に大変重い内容であり、どちらかといえば私の苦手な分野であつた。断りたいと思つたが、いつも全力投球しておられる斎藤さんと編集部苦労を知つていたので断り難く、何事にも楽天的な私は「何とかなるだろう」と引き受けた。

蓮月さんに連絡をとり、二月十三日に彼女の寺・覚了寺で開催を準備して、大阪在住の（あごろ）の会員に郵送で連絡した。まずこの問題に興味のある方は、彼女の文章をコピーをして送るので、連絡をほしいとした。三名の方より連絡が入り、文章を送付した。しかし、私の設定した日程では全員参加できず、座談会は延期となった。

吹田市に在住の小谷さんが、蓮月さんのお話をどうしても聞きたいとのことで、直接連絡を取っていただいて、吹田市で講演会が開かれることとなった。へあごろのメンバーのうち、先に連絡をしたとき興味を持たれた方にのみ再度郵送で通知を出し、私もこの会に参加させていただき、蓮月さんとはじめて出会うこととなった。

場所は吹田女性センターの一室でへいんぐすサロンという吹田市在住の女性グループが用意された静かな環境の素敵な部屋であった。

各地の「婦人会館」が「女性会館」に名称が変わったり、大阪府内でも「女性センター」が次々新設されて、女性をとりまく情勢は変わりつつある。大阪市立婦人会館を活動拠点としている私の所属（夕陽ヶ丘女性史グループ）も十余年の歴史があるが、去年、少ないメンバーのうち二名が病死、そのショックからいままでのようにテーマを定めての学習が休止となつていく。私自身は平和運動に取り組んでいたのに、久しぶりの女性問題であった。

受付で、色の濃いサングラスをした黒っぽい服装の女性に出会った。これが蓮月さんであった。サングラスをはずされ自己紹介の後、少し話をする。文章と写真から連想していたイメージとは合わず「カワイイ!」と思わず口にてたほど、笑った顔など親しみのある明るい女性であったのに、まずびつくりした。

へいんぐすサロンでは、私たち（へあごろ）のメンバーと男性一名を含めて三十数名で、皆さん熱心に聞かれていた。講演のあと、お茶とお菓子をいただき質問時間があつた。蓮月さんとの出会いの場所を提供してくださったへいんぐすサロンの皆さんに感謝するとともに、サロンの素敵なメンバーの今後の活躍を期待している。

これからが大変！ 損保業務

澤田 和子

私もあの日はドスン、グラグラという音と激しい揺れで目が覚めました。ふとんの上に座ったものの、どうすることもできません。「地震や、家潰れる！」と思いました。わが家は淀川べりの十二階建ての巨大マンション、その九階に住んでますからよけい大きく揺れたんやと思います。停電になって、障子開けましたけど外はまだ暗い。仏壇にあったローソクに火つけて、やつと家の中見えるようになりました。ありがたいことに家具の倒壊はなく、棚や本棚の上のものが落ちたんと、台所の油、しょうゆ、酢、小麦粉なんかがガラスの割れた破片と混ざって散らかってる程度でした。同じ建物の中でも家具が倒れてケガをしたところも数軒ありました。一時間ほどすると電気がついたんでテレビ見ましたけど、テレビ局内の揺れ写した映像だけで、大災害になるとは予想しませんでした。

私は損害保険の代理店やつてますので、阪神間にたくさんのお客さんいてはるんです。それですぐに会社へ出て、顧客名簿から被災地のお客さんのリスト出して事故の対応に備えました。けど電話がなかなか掛かれへんし、頼みの保険会社も社員が出社してきてへん状態で、一日中いらいらしてました。

翌日からは営業で外へ出るのはやめて、電話で事故の処置・相談に追われてました。私が今せなあかんことは、契約者のために頑張ることやと思いましたが、友人の安否を確かめることもせず、終日電話の応答に追われてました。

日が経つうちに、保険の支払いについてのまちがえた報道があつたり、うちが委託契約して損害保険五社の対応がまちまちやつたりしてほんとに困りました。生命保険とは違つて損害保険は全商品が統一料金で、保険金の支払いは統一されているはずなんですけど、各社がばらばらに新聞広告しはじめたんで、こんな大災害のときには協会で保険金の支払いや払い込み猶予なんかについて統一した広告出すようにしたら、トラブルやデマも減るのにと思いました。担当者にそのこと申し入れたりしたんですけど効果ありませんでした。今後は保険金の支払いめぐつていろいろトラブル予測されます。私自身たいへんな仕事してるんやと実感してます。

お客さんの安否尋ねて芦屋と長田に足運びました。テレビの映像で見るのと違つて、この目で見える光景は「悲惨」「むごい」という言葉では表せません。見物気分でカメラ持つて被災地に来る人たくさんいるそうですが「それでもええから、一人でも多くの人にこの惨事見てほしい」と被災地の人は語っておられました。

被災地への援助は、三日後に大阪市立婦人会館の学習仲間と生理用品を大量に買い込んでおくりました。友人たちもそれぞれの立場からボランティア活動に参加されていますが、私は時間がないのでカンパだけさせてもらってます。

「いま私に何ができるか」息の長い支援が必要でしょう。（あごろ2005号 1995年3月）

地震と損害保険について

澤田 和子

三月の「特集あごら」「阪神大震災ー女たちは動いた」で私は「これからが大変、損保業務」と書きました。それから数か月、阪神方面の損害保険に関する新聞記事は、この震災で支払ってもらえない損害保険についてのものが多く見られました。それを予測していましたので「大変」という言葉になったのです。

地震が起因での火災は、火災保険だけであれば支払えないと約款にあります。私の会社の顧客は神戸方面にも多くあり、その対応に追われた毎日でした。被災されたかどうかの確認にも手間取りました。地震保険をつけておられた顧客には、今回は保険会社も拡大解釈をしてくれたので支払いも早く、喜んでいただきました。しかし火災保険のみで倒壊された家には、一月十七日より終期までの保険料を返すことしかできませんでした。保険会社の社員も代理店も、初めてのこの大惨事にとまどいながら対応しました。

調査によると、地震保険を付けていた人は全体の三パーセントだということです。なぜそのような付保率なのかというと、地震保険は保険料も高く、補償額は建物で一千万円、家財で五百万円が限度です。また補償の範囲も狭い上、私たち代理店に支払われる手数料も低く、さらに関西地方は地震も少なく、代理店も客も地震保険を積極的に付保しなかったのが実情です。

マスコミがこのことについて報道をしてくれていましたので、私の顧客からはあまり苦情を言わ

れませんでした。が、代理店として何もしてあげられないもどかしさを感じました。また火災保険の
みの方には、地震の発生から七十八時間内の火災は「地震に起因していて免責」となりましたが、
何度かの余震とか、他からの類焼など判断に困る場合も多く、水が出ない、消防車が来れないな
ど最悪の条件が重なりました。業界の報告によると、どうしても納得のいかない契約者と係争事件
になっていることもあるようです。無事を確認した顧客からその後の更改のときに「あんたはお菓
子を持つて見舞いに来なかつたからダメだ」とも言われました。保険会社は約款に従つて支払いを
しますが、最近の新聞に「損保会社最大手の東京海上がそごう百貨店の震災直後の盗難に、地震の
免責を適用せず保険金を支払つた」という記事があり、大口契約者の優遇が指摘されていましたが、
私たちはその会社のやり方にあきれています。

私は代理店業務を個人として十年、法人として十五年しています。ますますこの仕事の重要性を
身にしみて感じています。そごうの支払いではありませんが、約款の解釈の仕方では支払えることも
あり、自分の顧客をどのようにして守るか、努力を続けたいと思います。北京女性会議に参加され
た「あこら旅の会」のみなさんの海外旅行傷害保険も多数引き受けさせていただきました。みなさ
ん無事帰国されたので私の業務能力を知っていただけませんが、今後何か損害保険について
トラブルが発生しましたら、ご相談下さい。お役に立てると存じます。

十勝沖地震、島原の噴火、それにこの阪神大震災が重なり、地震保険も来年一月に改定されま
す。が、あまり料率も下がらず、証券という目に見えない品物を販売する仕事の難しさをかみしめてい
ます。

(連絡先・〒五二三 大阪市東淀川区港路一・五・二・四四八
TEL 06・322・2203 FAX 320・3413)

(あこら213号 1995年12月)

〈編集後記〉

◆北京女性会議に参加するために準備に忙しい斎藤さんから、「名編集者の山際さんも職場を退かれて自由の身になられたことだし、大阪でも『あごろ』を編集して頂けませんか」との申し出がありました。山際さんと相談をして、大阪からは誰も北京に行かないことだし、「協力をしましょうよ。前の〈阪神大震災〉特集号で取り組んだ売り上げのカンパなどの報告もしなければならぬし」と安請け合いをしてしまいました。

西宮でボランティアの拠点をされている石井さんにたまたまお会いして意気投合、「その後の阪神」を伝えようと、九月に座談会を開くことからスタートしました。その座談会の四時間に及ぶテープを起すことを受け持った私は、イヤホンを耳にワープロキーを打ちながら、テープを何回も聞き、

テープ起こしをしたのです。仕事の合間にする慣れない作業で、肩が凝るやら目がチカチカするやら。「えらいこ」と引き受けてしもたなあ」と後悔しながら、打てたものを、山際さんのもとへファックス送信をして、訂正してもらったのをまた打ち直すという作業をくり返しました。長年編集者として仕事をしてくられ、やつと定年を迎えてゆつくりしようと考えておられたのに、山際さんにもご迷惑をかけました。またボランティア活動に多忙な石井さんにも加筆、補筆をお願いし、東京の編集部も含めてこれらすべてファックス通信と速達とのやりとりでやつとまとめることができました。充分な編集とはいえないと思いますが、後二か月で一年を迎える現地のようすが、少しでも伝わればと思います。

阪神大震災には多くの方がボランティアをされましたが、私は今回は仕事

を最優先とし、自らの身体を使うことができませんでした。せめて〈あごろ〉に協力をして、マスコミの取り上げなかった女性のこまやかな活躍を、会員のみなさまに知っていただけたらと、この号の編集に協力いたしました。沖縄号とともに、たくさん購入をして少しでも多くの方に広めることで私のボランティアとしてとおもいます。

(大阪 澤田 和子)



(あごろ213号 1995年12月)

■特集 これからの女性センター■

大阪市立婦人会館と

自主グループ連絡協議会について

澤田 和子

一九五九 大阪市地域婦人団体協議会が、女性たちが自由に集い学習するための会館を持ちたいとの思いで「建設促進一日一円募金」をはじめた。

この熱意が大阪市を動かし、市立婦人会館の建設が始まった。

六二 婦人会館開館 婦人講座開始（料理・服飾・住まいのデザイン・ホームマネジメント等）。

六三 新しいくらしの相談室開始（家庭経営・社会生活・育児と教育等）。

六四 婦人講座年間七十教室（夜間中心）、託児開始、月刊誌「女性サロン」創刊。

六五 くらしの相談室女性ルームで「女性の職業と家庭」。

六六 三階増築、託児室ほか設置。

六八 通信婦人講座開始（書道・ペン習字・文章）

七〇 婦人教養大学開始（都市開発と私たちの生活） 婦人講座、一般教養科目拡大へ。

七二 ブライダルスクール開始（全六回、夜間）。

七五 婦人教養大学（現代女性の生き方・現代日本女性史）。

七七 おんなの生き方を考える講演と座談会開始 放送利用学級開始。

七九 私たちの婦人問題セミナー（女性の歴史を読む・女性史を学ぶ等）。

八〇 初の長期講座「私たちの婦人問題セミナー」報告書作成。

八一 主催講座の編成替え。朝、昼の全講座で一時保育、全講座無料化、女性問題を視点にすえる。二年制の婦人問題講座（日本の近代と女性・女性論の系譜等）。婦人社会大学、報告書作成発表、「女の生き方を考える」月一回開催。

八二 二年制講座等から自主グループ発足。

八三 自主グループ連絡協議会発足（五十グループ）。

八七 女性問題講演会開始。

八八 講座名称変更、「婦人」を「女性」に。

八九 女性のための芸術・文化サロン開始、現在に至る。グループ助成セミナー開始（自主グループと共催）。

九一 くらしのセミナーで「ビデオで語る世界の女性」。

九四 くらしのセミナーで「男の生活講座」「夫改造講座」等開催。

九五 女性問題セミナーで「男性学への招待」「近代大阪の女性史を紡ぐ」。

くらしのセミナーで「ウイメンズ・フォトスクール」「女の大工工房」。

九七 婦人会館三十五周年記念フォーラム開催。

この年表は、昨年三十五周年を迎えた婦人会館が「学んでチャレンジ！ 女たちの二十一世紀へ」を

テーマに、上野千鶴子さん等によるパネルトークを開催されたとき、参加者に配布された年表の中から抜粋させていただいた。一枚の表の中に婦人会館のあゆみと大阪市の動き、女性・教育をめぐる法律、社会の動きが簡略にまとめられている。女性を取り巻く環境の変化が一目でわかるすばらしい資料で、社会の動きのなかで婦人会館の主催講座やタイトルの変化が見られる。

開館から十九年間は、趣味の講座や結婚や生活をテーマにした短期間の講座であったが、国連婦人の十年の中間年世界会議後、神田道子東洋大教授が「コペルニクスの転換」と絶賛した無料の二年間の女性問題講座がスタートした。この講座終了後、修了生たちが自主学習グループを結成し、それぞれに学習したことを社会に還元すべく活動をしてきた。

保育ボランティア講座の修了生たちも婦人会館を拠点に活動していて、その他のグループも学習にとどまらず、それぞれに社会のなかで活発に活動をしている。

〈女の目で大阪の街を創る会〉は大阪の地下鉄を検証・提言して、大阪NPOアワード'97センターのグランプリを受賞した。〈ドキドキ考古学〉は難波宮のガイドボランティアとして活躍中。

私の所属する〈夕陽丘女性史グループ〉も女性と平和の問題をテーマに、細々ながら弁護士・医師や他の平和グループと交流し運動を続けている。

そのような講座終了生のグループと、俳句・書道・茶道など会館設立時より学習されている趣味のグループが協力しながら、〈グループ連絡協議会〉(略称連協)を組織し、婦人会館と共に発展してきた。

昨年大阪市の女性施設の構想が発表になり、この婦人会館が「女性いきいきセンタークレオ大阪中央」として生まれ変わるようになった。私たち連協のメンバーは、突然のことに学習の場がなくなる、とたいへん驚き、婦人会館や大阪市教育委員会にお願いをしたりした。

連協で話し合いの結果、歴代の役員に呼びかけ〈婦人会館の明日を考える会〉を発足させた。私たちの今までどおりの学習の場の確保と、新しい施設に女性の意見が採用されるにはどうすればいいかと討議を重ね、以下のような活動を始めた。

まず、『あごら2224号』『女性と女性センター つくる・つかうを考える』を編集された渋谷典子さんのお話を聞く会を昨年十一月に開催した。

次に、一九九四年「大阪府立婦人会館」が「ドーンセンター」として再建されたとき、府立婦人会館の学習グループが同じ体験をされたので、当時の自主グループの会長（松原静子）さんにお話を聞く会を二月十四日に開催した。府立婦人会館の前身は国防婦人会館で、一九三七年、なにわ女の五銭十銭の基金を基礎に建設されたもの。当時のことを詳しく語っていただき、行政に新しい施設についての意見を出すこと、この問題の議会を傍聴すること、助成金の申請をしたりバザーをして活動費を用意したことなどをお聞きして、たいへん参考になった。

これらを参考に、連協は今後どのようにすればいいか考えなければならない。取り壊し建築期間は、代替場所で婦人会館が運営されるので、当面私たち連協や自主学習グループは使用できるが、クレオ中央館になったときが問題である。

『あごら2224号』にも書かれていたが、婦人会館は大阪の歴史に名高い上町台地の静かな環境のなかにあり、美しい庭と、ホールや学習用の会議室がたくさんあり、使用料が他の施設と比較すると安価である。私はここでの学習が自分の生き方に変革をもたらしたことに感謝している。思い出深い学習の場が取り壊されるのは悲しいし、経済不況のなかで、まだ十分使用できるこの美しい施設を取り壊し再築する必要があるのかと考える。

(あ)ら251号 1999年7月



ハーグ市民国際平和会議

第一回国際平和会議がオランダ・ハーグで開催されてからちょうど百年、その同じハーグで、5月12日から15日まで、第三回国際市民平和会議が開催された。

世界百以上の国から平和を求めて一万人のNGOや市民が集まり、日本からも四百人が参加した。大阪からも大阪弁護士会・平和問題懇話会の弁護士四人と私が参加した。

今世紀最後にして最大の平和の祭典といわれるこの会議の開会式は、入場制限で入れなかったが、会場内外はあらゆる国の人たちが民族衣装を着て、音楽や踊りのアピール。言葉がわからなくても共感できた。日本の若者たちもゆかたを着て、輪の中にいる姿は頼もしかった。

土井たか子社民党党首をはじめ、大田昌秀沖縄県前知事、

広島・長崎市長などがジャパン・デー(13日)や各分科会で日本の現状をアピールされた。特に土井さんは「日本の誇れる憲法九条を世界に」と訴えられた。

日本のNGOの努力により、最終日に出された平和アピール「二十一世紀の平和と正義への課題」の第一条は「各国議會は、日本国憲法第九条のような、政府が戦争をすることを禁止する決議を採択すべきである」となった。

私たち大阪のメンバーも憲法九条を図案化したTシャツを着て、坂井尚美弁護士が九条の大切さと新ガイドライン反対をアピールされた。また、「おおさか国際平和センター(ピースおおさか)」や大久野島毒ガス資料館(広島)の紹介などをした。

このハーグ平和会議の報道は、新聞によってかなりの偏りがあつたように思える。帰国して各紙を集めて見ると、関係記事は大阪では朝日が多く、他紙はすこし、産経はなし、という状況であつた。新ガイドライン関連法は国会で承認されたが、あの素晴らしく盛り上がったハーグアピールに対して日本の政府は?.....悲しくなってくる。

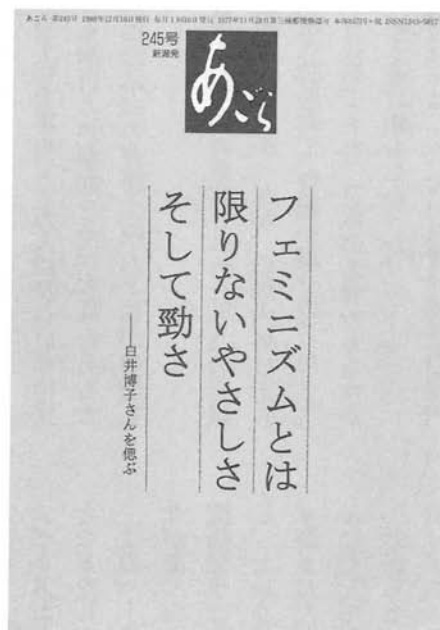
だからといって何もしないと、状況はますます悪くなる。負けずあきらめず運動を続けよう。

(澤田和子)

お志を継ぎます

澤田 和子

あなたと初めての出会いは一九八一年大阪市立婦人教育会館での「婦人問題講座」でしたね。二年間の長期講座で共に「近代女性史・女性論」を学びました。今あなたのことを書くためにその時の研究論文集を広げています。当時三十九歳のあなたは、応募動機に「十一年間の主婦としての重みを大切にしたい」と書いておられます。明治以降の近代女性史の中で十五年戦争にどの



あごら245号
(1998年12月)

ようにして女性もかわったか、加害の視点に重きを置いた学習でしたね。

わたしはそのとき『あごろ』に出あいました。あなたは新潟の時から会員だったのでしょね。終了後有志で〈夕陽丘女性史グループ〉を結成し、女性と平和をテーマにご一緒に運動をしましたね。今も私たちは〈戦争を考える会〉などは継続しています。

五周年を記念して寿岳章子先生を迎えて講演会「日本語と女のかかわり」を開催したとき、講演内容のテープ起こしをあなたは一人で引き受けてくださいました。それを私たちは冊子にまとめ、今もグループの紹介に使用し、その都度あなたのことを思い出して感謝しています。

おつれあいのご転勤で千葉に行かれ〈あごろ事務局〉にかかわってください、北京世界女性会議に参加され、多くの〈あごろ〉メイトのお世話をなさったと聞きました。私たちのグループが十五周年を迎える前に大阪に永住されることになり、またグループに戻って頂けると、みんなとても喜んでいましたのに入院されたと聞いてびっくり。私も二、三度お見舞いに行き、重病であることを知りました。しかし病床でもあなたはにこやかに、泣き言を言われず「本が読めないのが辛い」と漏らされただけでした。あなたが亡くなられたことをお聞きした時の驚きと悲しみ、斎藤千代さん、山際美代子さんと通夜と告別式にご一緒させていただいて、あなたのやさしいたおやかな写真を見ながらのことは言葉になりません。また涙が湧いてきます。もう一年たったのですね。

グループは、あの時解散をしようかと思いましたが、あなたの言葉を思い出し、十五年のグループの活動の重みを大切にして、二十一世紀が平和で差別のない社会の到来であることをめざしてささやかな運動を続けます。見ていてくださいね。

(大阪市)

長谷川暁子（劉曉嵐）さんとの出会いから

澤田和子

私の友人木田^{ぼくだ}日登美さんが、八年前中国に留学するため、同じ大阪経済法科大学に勤務していた劉曉嵐さんの相談相手に私を選び、紹介をして日本を離れて行ったことから、曉嵐さんとおつきあいがはじまった。有名な反戦エスペランティスト「長谷川テルの娘」日中の混血児ということであった。

大阪の平和運動家・反核実業人の会の宝木武則さん（エスペランティスト）が長谷川テルさんの日本脱出を援助され、曉嵐さんに大阪の家を提供しておられた方と知って、過去のいきさつを教えていたのだ。そして八〇年に制作された日中初の合作テレビドラマで、栗原小巻さん主演の『望郷之星』の存在を知り、ビデオを借りた。しかし、何度もダビングしてあり、声のみで画面が見えない。なんとか鮮明なものを見たいと、曉嵐さんに頼んだところ、栗原さんを経由して制作会社からビデオが送られてきた。それを見て「日本人でこんなすごい女性がいたのか」と驚いた。

私は、大阪市立婦人会館で近代女性史を学習したが、その中には長谷川テルは出てこなかった。何故だろう？　と思い、手元にある歴史の本を探したが見つからなかった。ようやく中国関係の本の中で紹介されていて、日本兵に向けた反戦放送をした人であること、エスペラントで書かれた書物が多くあることもわかった。このビデオをたくさんの人に見て貰いたい、この素晴らしい女性を知って貰いたいと、

私は走り出した。

九二年九月、まず私の所属する〈夕陽丘女性史グループ〉の十周年記念イベントに上映会ができたらと考えた。暁嵐さんから八月に大阪・八尾に栗原さんが公演に来ておられることを聞き、楽屋に暁嵐さんと宝木さんと一緒に訪問した。栗原さんの了解をとり、東京に出かけ、制作会社テレパック社と提供会社サントリー広報部の許可を受け、脚本を書かれた岩間芳樹さん（本年六月死去）にもお願いをして、「平和運動に使用する」との条件で上映の許可を受けた。九月二十七日、婦人会館のホールに、多くの参加者を迎え、初めて上映会が開催ができ、暁嵐さんに挨拶をしていた。平和運動を通じて知り合った弁護士や、作家の武田英子さん、京都の服部素さんも来てくださり、反響を呼んだ。このとき参加してくださった方が奈良や兵庫などでも上映会を何度か開催してくださった。そして、私の手元に、テルに関する書物や資料がたくさん集まってきた。

この後、九三年二月、暁嵐さんは日本国籍を取得、長谷川テルの娘、長谷川暁子と名られた。嵐のあと暁の到来を願ってつけられたであろうその名前を、彼女は「もう嵐はいやですから嵐を捨て暁子にしました」と言われた。その言葉に、彼女の長い厳しい人生が語られていると感じた私は、今もその言葉を忘れることはできない。

武田英子さんの紹介で、九四年一月に、あまり気乗りのしない暁子さんと山口の〈中国残留婦人交流の会〉に出かけた。彼女によれば「母テルのことを話せ」と言われても、生後一年未満で死去した母の記憶はないし、「有名な反戦エスペランティスト・テルの娘」が、この頃重荷になっていることと、心ない人たちから父劉仁の重婚説がささやかれていたことが、暁子さんの心を重くしているようだった。

前日からの大雪の中を、講演の前、世話役の方が瑠璃光寺に案内してくださった。この寺のご住職が、

彼女が中国人と知り、特別なお部屋に通して下さり、いろいろなお話をしてくださった。真っ白な雪のお庭と温かい言葉に彼女の心がなごんだ。

この後の講演「私の生き方」では、彼女は、今までの人生と日本と中国の間で平和を望む自分の気持ち、留学生のこと、残留婦人のことを、美しい日本語で話され、さすがテルの娘と、大きな評価があった。重婚であろうと、テルと劉仁の愛は深いし、平和運動に捧げた二人の生き方と関係はない、と私は思う。

二月に〈ピースおおさか〉に栗原小巻さんを迎え、上映会のあと坂井尚美弁護士（大阪弁護士会・平和問題懇話会）に司会をしていただいて、栗原さんと暁子さんが、テルさんのこと、ロケで中国に行かれた時のことなどを、たくさん参加者の前で語られた。会場には当時日本軍の通信兵として重慶でテルの放送を聞いた方からも発言があり、短い人生を平和に捧げたテルとその夫劉仁のことは、参加した多くの人たちに深い感銘を与えた。栗原さんはやさしい方で、暁子さんに「私はあなたのお母さんですよ」と話されている。

本年一月、京都立命館国際平和ミュージアム〈平和友の会〉の服部さん（あこら京都）から暁子さんに講演依頼があり、暁子さんは、母テルのことではなく「二つの祖国をもつ、私なりの平和への歩み」として話してくださった。「もうこれが母のことを話す最後にしたい」と。いやがる暁子さんを「平和のためだから」と連れ歩いた私は、本当に申し訳ないことをしたと思う。しかし暁子さんと行動を共にして、私の中ではテルさんと暁子さんが重なり、暁子さんの平和を愛する人間性と、豊かな感性、そして二つの祖国をもつ国際人として、尊敬の念がますます強くなってきた。暁子さんをもっと多くの人に知って貰いたいと思うようになってきた。

九六年十二月末、兄の劉星さんが北京で死去され、劉仁・テルの遺児は暁子さん一人となった。彼女は今、大阪・京都・神戸の大学の非常勤講師や朝日カルチャースクールの中国語の先生として生活し、忙しい日々の中、私たちと一緒に平和運動をしてくださっている。「さすがテルの子」と周りの人たちは評価するが、本人は「テルはテル、暁子は暁子」としておられる。自分の言いたいことはきちんと表現し、平和に関して素晴らしい感性を持ち、行動をされている。テルと劉仁の平和への思いは暁子さんにきっちり引き継がれていて、頼もしい限りである。彼女についてはもっともっと書きたいことがたくさんあるが、誌面の都合で割愛しなければならないのが非常に残念である。

私と暁子さんの出会いをつくってくださった木田さんとは十年前ベルギーで開催された「原爆被爆者・国際法廷劇」に参加される大阪在住の被爆者の援助をして、初めての海外旅行をしたことがある。役目を終えたあと、二人でオランダに行きアンネの家を見学したことがなつかしい。中国へ留学した木田さんの成果が実り、今年の夏、北京の学生向けに『アンネの日記』を中国ではじめての翻訳劇として演出されている。先日、北京の木田さんからの便りで、『アンネの日記』の上演が成功したことのお知らせと、新聞記事が届いた。早速、暁子さんに翻訳してもらい、二人で木田さんの成功を喜んだ。

私は八一年から二年間、大阪市立婦人会館で近代女性史を学習後、〈夕陽丘女性史グループ〉を結成、同時期に小さな会社を設立し、代表者に就任した。仕事と家事の余暇に、女性と平和の問題の学習と運動をしてきた。その中で〈あごろ〉と斎藤千代さんに出会い、また、平和を求めて運動をしておられる多くの方々に出会った。

いま日本は、テルさんが命をかけて闘った、戦前の時代に逆行していると思う。ガイドライン法案をはじめ、いろいろな法案が国会で承認され、憲法九条も危なくなっている。『あごろ二五一号』で報告を

した、オランダ・ハーグ世界市民平和会議は、「公正な世界秩序のための十の基本原則」を採択し、その第一項目に日本国憲法の理念が採り入れられ、「憲法九条」は世界に輝いた。

その世界に認められた「憲法九条」を、私たちは守る努力をしなければと思う。運動をするなかで出会ったさまざまな方々と力をあわせ、ささやかであるが私なりの平和運動を続けたいと思う。

この大変な時期に、長谷川テル・暁子母娘の特集号を組んでくださった『あごら』の皆さんに深謝する。そして、この特集号をたくさんの人に読んでもらえたらと願う。

(あごら大阪)

◆北京の夕刊紙に紹介された木田日登美さんの『アンネの日記』



木田日登美さん

中央戯劇学院の張先生と彼の指導している日本人留学生・木田日登美さん、北京人芸の若手通訳員朱紅さんが『アンネの日記』を中国の舞台上で上演しようという話を聞いたとき、マスコミは心配した。(中略)しかし、七月二十五日、菊儿胡同七色光劇場で初上演された『アンネの日記』を観ると、この心配はまったく余計なことだとわかった。観客の笑い声、とりわけ、少年少女の観衆の無邪気な笑い声は劇場の雰囲気と和ませた。哀しい物語は、必ずしも哀しい手法で表現するとは限らない。究極の環境の中に満ちた青春への賛美、命への執着、平和への憧れは、人びとに希望を与えた。(中略)豪華な劇と比べたら、『アンネの日記』は確かに小劇にすぎない。僅か二、三十万円の資金、伝統的舞台設計、無名の俳優、素朴な飾りでありながらも、この物語は秋の午後、爽やかな香りを漂わせて人びとの心を酔わせた。

(『北京晩報』七月三十日付 文責・満岩記者 訳・長谷川暁子 要約・あごら編集部)

(あごら253号 1999年9月)



女性学・ジェンダー研究フォーラム
——大阪発のワークシヨップから

〔その2〕

「あごら大阪」はワークシヨップ「女性センターと女性のいい関係とは？」を開催した。

「あごら」ではこれから全国各地で建設される女性センターや既存の女性施設を取材し、『女性センターⅠ・Ⅱ・Ⅲ』号を発刊したが、そのⅠ・Ⅱ号の編集に携わった渋谷典子さん（あごらウイン）の意見の発表を受けて、全国各地から集まった参加者の意見を聞き、二十一世紀男女共生社会に役立つ女性センターを皆で考えたいという企画だった。

渋谷さんは名古屋市男女共同参画センター（仮称）の設置に向けての提言をまとめられた資料に基づいて発表し、それを受けて会場から活発な発言があった。行政側（女性センターの職員）や、囑託やボランティアとして女性施設の運営に携わっておられる方の意見も多く、施設も大切だが利用者と職員とのコミュニケーションが大切だと感じた。また、新しく建設されるところ、既存の建物を立て替えた、大阪市立婦人会館のように施設の内容が変わるところ、それぞれ違いはあるが、ハード、ソフト両面で施設を利用する住民の意見を取り入れてほしいという意見が多かった。アンケートをまとめてみると、女性センターはこれからも必要という回答が多く、施設の条件についても、望む施設（会議室、講演会場、和室、図書室、資料室、コピー機、FAX、印刷機、製本機、パソコン、ワープロ、ビデオ、喫茶室、食堂、売店）などすべて必要との答えが目につく。今回は七十五名もの多数の方の参加があり、いかに今後の女性センターが大切かがわかる。今後男女共同参画推進センターを設立の予定なので、今回のワークショップが大変参考になった」とアンケートに書いていただいたことはうれしいことであった。

（澤田和子）

(澤田和子)

いま、憲法を考える

みんなで力を合わせ憲法九条を守ろう

澤田和子

一九九五年五月、私も参加したハーグ市民国際平和会議で採択された「公正な世界秩序」の十の基本原則」の第一項目は「各国議会は、日本国憲法第九条のような、政府が戦争をすることを禁止する決議を採択すべきである」だった。参加した多くの日本人はとても喜んだ。社民党土井党首の演説も非常によかった。しかし帰国すると、「周辺事態法」「日の丸君が代国歌・国旗法」「通信傍受法」などの法律が成立した。憲法改正のための憲法調査会もできた。世界に誇る「第九条」はどうなるのだろうか。

今年の五月三日、憲法記念日に私も何か行動を起こさねばと、日頃同じ活動をしている〈九条連近畿〉のみなさんに誘われ、街頭リレートークに参加した。しかし、私たち

のトークを聞いてくれる人は少なく、がっかりした。ハーグから帰国する途中に観光に立ち寄ったノルウェーの憲法記念日のことを、ふと思い出した。

その日は祝日で、観光バスの車窓から見える風景は、どの建物も国旗がはためき、広場では民族衣装をまとった人たちがパレードをしている。国全体、国民全体が憲法記念日を喜び、お祭りをしている様子をうらやましく思った。

先日一九四六年二月の、マッカーサーの命令によるGHQの憲法の草案づくりをテーマにした『真珠の首飾り』を観劇し、女性の権利条項(二四条)を担当したベアテ・シロタ・ゴードンさんの講演も聞いた。

ベアテさんは日本の女性を考え、人権条項の草案を書かれたが、今、日本の女性へのメッセージとして「持っている権利を毎日の生活の中に生かし、平和運動をして自分の子どものために闘わねばならない。政治に参加すること。日本は過去、外国から受け入れたさまざまな文化を発展さ

せ自国のものになっている。憲法もGHQから押しつけられたものであっても、五十三年も改正せずにきたのは良いものであったからである」と結ばれた。

私は、小さなグループに所属し、平和運動の経験は短い
が、いつも思うのは、活動家たちは「あの人」は〇〇派、元
〇党で昔ひどい目にあった等々」と、相手のことを非難し
て一緒に運動しようとはしない。各地にたくさんさんの運動
体はあっても点々として線につながらない。なんとか過去
のいきさつを捨て、「憲法九条を守る」ことだけで一致協力
ができないだろうか。

(あごら大阪)



(あごら253号 1999年9月 あごら大阪発)



◆編集の素人の私が、ハーグ会議報告の
編集も引き受け、この『あごら253号』
と二冊が同時進行した。長谷川テル、暁
子母娘のことを、一人でも多くの人たち
に知ってもらいたいという願いを実現さ
せてくださったことに感謝。平和運動で
知り合った人たちに書いていただけたこ
とは大変ラッキーでした。一冊でも多く
売ります。

(和)

住友電工裁判・判決に思う

裁判をする勇氣

澤田和子

私は〈あごろ大阪〉のメンバーとして、朝日火災『夫婦別居配転不当裁判』のことについて報告書を発信していたが、私は小さな会社の経営者であつたので、「なぜ女性の裁判を支援するのか?」と不思議がられた。

二〇年ほど前になるが、私はその会社を設立する前、朝日火災の個人代理店をしていた。老後のユートピアをめざして高齢者の個人代理店を統合して会社をつくる話を持ち上がり、これは面白いと参加を決め、はずみで社長を引き受けた。この中心になった人が朝日火災の労働組合の活動家であつたために、その人たちを潰すコースに私も巻き込まれ、私が女であつたためこの会社は陰湿な妨害をした。

そのとき私も朝日火災を相手に裁判を決意したのである

が、お金と時間、そして、勇氣がなかったため、あきらめて仕事に励んだ。私と一緒に仕事をする人たちは、その朝日火災で定年を切り下げられた方たちであつたので、退職させられると会社を相手に『定年・退職金切り下げ』の訴訟を起こした。京都・神戸・伊丹・小倉と、それぞれの最終勤務地で裁判がはじまった。私は事務局を引き受け、自分の会社の利益をそっくり支援に当てたので赤字経営が続いた。就業規則、労働協約など私の知らないことがたくさんあつたが、これも勉強と思つて取り組んだ。この一連の裁判は、その人の定年時の地位によつて、一九八三年から九七年にかけてそれぞれ勝訴、敗訴の判決がでた。最高裁まで傍聴に行ったことがなくしく思い出される。

その同じ時期に朝日火災樋口事件で宮地弁護士と知り合つた。飾り気のないそのお人柄にひかれ、いろいろな会合で生い立ちなどをうかがつた。学生時代に就職説明会で男女差別を受け、弁護士になられて女性の差別問題をあつかわれるきっかけになられたことなど、人間としての魅力

を感じ、宮地弁護士を担当される裁判に興味をもち、傍聴や、わずかな支援をしてきた。WNNの正路さんは私のことを「宮地弁護士の追っかけ」と笑う。

七月末に住友電工裁判が大阪地裁で敗訴のニュースにはショックを受けた。八月四日、ヌエック（国立婦人会館）での「女性学・ジェンダー研究フォーラム」でのワークシヨップのテーマを急ぎよ「住友不当判決」に変え、参加の人たちに訴えた。その時集まったカンパをWNNに届けることもできたが、もともと全国の人たちにこのことを知ってほしいと思っていたら、〈あごろ〉の斎藤さんが『あごろ』で特集を組みましようよ」と言ってくれた。

私に何が協力できるか考えた。一九九六年に発行された『平等へのおんなたちの挑戦』も再読した。住友裁判の原告の方たちの職場で差別を受けた長い歴史や提訴に至る気持ちなどが書かれていて、あらためて裁判の意義を感じた。WNN主催の報告会で原告がそれぞれ感想を述べられたのを聞いていて、ここに至るまで職場や家族、周囲の人間関係の軋轢は大きいと察したが、皆さんが明るく裁判のことを淡々と語っておられてほっとした。ヌエックで日立裁判の方に出会ったが、やはりからっとして明るかったのと同

じ印象であった。私の支援していた男性の原告に比べて、男と女の違いなのか。男性は何となく元気がなかった。宮地弁護士にそのことを話すと「女はこれ以上失うものがないのね」と言われた。

支援をしているWNNのメンバーも、原告たちのために運動をしているのではなく「自分のためです」と言い切り、またいろんな学習と世界各国の人たちと交流ができると案しんでおられる。私は勇気がなかったので裁判ができなかった。だからこそ、この勇気あるすばらしい女性たちのことを少しでも多くの人たちに知って欲しいし、多くの人たちに支援の輪を拡げたいと思う。厳しい状況のなかで闘っている人たちにエールを送りたい。そして男女差別のない二十一世紀を迎えられたらと願う。

（さわの会／あごろ大阪）



あごろ263号
(2000年11月)

『長谷川テル』を辿る中国の旅 その概要

長谷川テル（一九一二〜四七）は二十代半ばでエスペランティストの同志である中国人青年・劉仁と結婚。中国に渡り、日中戦争下の中国で日本の侵略に反対し、ラジオ放送を通じて日本軍兵士に「無駄にあなたたちの血を流さないで下さい。あなたたちの敵は海

のこちら側にはいません」と呼びかけた女性である。日本の敗戦後、東北地方のジャムスでわずか三十五歳で亡くなり、さらにその三か月後には、最愛の妻を追うように夫の劉仁も三十六歳でこの世を去った。二人はジャムスの革命烈士墓に葬られ、幼い二人の遺児があとに残された。

一九九一年、〈あごら大版〉世話人で〈夕陽丘女性史グループ〉を主宰する澤田和子さんは、テルの遺児・長谷川

暁子さんと知り合い、「長谷川テル」の名を初めて知った。澤田さんは彼女の生涯に衝撃を受け、日本ではあまり知られていないテルの業績を世に広めるために奔走する。その努力は一九九九年に発行した『あごら二五三号 闇を照らす閃光―長谷川テルと娘・暁子』に結実した。

その後も澤田さんは「いつかテル・劉仁夫妻の終焉の地であるジャムスを訪れたい」という思いを抱き続け、二〇〇二年九月、ついに『長谷川テル』を辿る中国の旅を実現した。

九月十四日から十九日、北京・長春・ハルビン・ジャムスを巡る五泊六日の中国・東北地方の旅で、澤田さんの呼びかけに応えた参加者十九名は何を見、何を感じてきたのだろうか。今回

の『あごら』では、参加者一人ひとりの旅の想いをお伝えする。

◆ 今回の旅の訪問地



旅を企画して

澤田 和子

私がなぜ長谷川テルに取りつかれたか

それは、一九九一年のある日、親友の木田日登美さんから長谷川暁子さんを紹介されたことに始まる。長谷川テルが有名な人であったなら、私は、こうものめり込まなかったであろう。知る人ぞ知る長谷川テルがなぜこのように知られていないのか。日中国交回復十五周年に制作されたテレビドラマ『望郷の星』、その後、日本テレビの「知ってるつもり」でも取り上げられたが、ほとんどの人の記憶にはない。そういう私も知らなかったのだから、えらそうなことは言えない。知らなかったから知りたいという思いがつのり、著作や文献を集めた。暁子さんからも大切な本をいただいた。私の本棚の長谷川テルのコーナーにはたくさん資料が集まった。

私は知ったことをそつと自分の胸に閉じ込めていることができなくて、この素晴らしい女性をもっと大勢の人に知ってもらいたくなり、行動をはじめた。九四年、当時（ピースおおさか）の事務局長だった有元幹明さんをお願いして、栗原小巻さんを招いていただいた。大成功であったので、それ以後有元さんより「仕掛け人」とニックネームを頂戴した（ちなみに私の携帯の着メロは「仕掛け人のテーマ曲」である）。そして、それが、一九九九年九月に発行した

『あいら二五三号 闇を照らす閃光―長谷川テルと娘・暁子』につながったのであった。

『あいら二五三号』は、二〇〇二年十月二六日の『東京新聞』の記事「抗日に生きる」に紹介された（ちなみに一九三八年の「嬌声売国奴」を書いたのはこの新聞社の前身である）。九年十二月には平和・協同ジャーナリスト基金の運営委員会賞もいただいた。友人たちがたくさん購入してくれて、宣伝をしてくださったり、（あいら）の会員になってくださった方もあった。いろいろな場所で、テルについて語る機会も得た。友人の紹介で大阪市教育委員会（北市民教養ルーム）での、平成十二年度成人大学講座「地球を結ぶ女性たち・戦前編」の講師の一人に選んでいただき、長谷川テル「闇を照らす閃光」とのタイトルで二時間語らせてもらった。暁子さんが花束を持って来て下さり感激した。とてもうれしいことであった。そして、J R 西労の女性たちの会（星砂の会）が広島で、（ウイン女性企画）の「歴史でみる男女共同参画社会」が名古屋で、それぞれ私を講師として語らせてくださった。

旅の実現に至るまで

九二年に東京・大泉学園前で劇団・演劇工房が『ヴェルダ・マヨ』を公演することを聞いて、テルの若き日に交流のあったエスペランティスト宝木武則さんと見に行ったことがある。その帰途一人で横浜の港に行った。「テルが劉仁のもとに行くためこの港から船で出発したのだ」と感慨深くしばらく港に立っていた。そのときからいつか終焉の地・佳木斯に行ってみたかと考えていた。

「日中国交回復三十周年」――二〇〇二年に実現するしかない、長谷川テルを辿る中国の

旅」の企画を立てた。坂井尚美先生にご相談をして、帰国されていた木田さんと暁子さんと三人で、知人の旅行会社トラベルアイの西島善治社長を訪ね、行きたいところを数か所ピックアップしてお願いをした。（私たち三人は年に一、二回木田さんの帰国にあわせて出合い、おしゃべりをする。二つの国のことをよく知っておられる二人の話を私は楽しんで聞いている。）

西島さんから企画書が出され、当初は佳木斯への墓参を先にと思っていたが、現地の交通機関の事情で最終地が佳木斯となった（このことが現地では九・一八事変の前日十七日にハルビン訪問、当日十八日の墓参となり「革命烈士の遺児と共に日本より平和運動団体が来た」とマスコミが殺到したことにつながる）。

企画書をもとに、友人、知人に百二十通ほどの案内を送付した。『あごろ』『9条連ニュース』にも宣伝文を書いた。私の強引な勧誘に、『9条連近畿』も応援してくださり、JR西労の田村委員長と西村さん、宮本さん、広島の宮原さん、そしていつも忙しい有元さん、女性は〈夕陽丘女性史グループ〉の西原さん母娘、〈あごろ〉会員の宮崎さんと友人の山口さん、そして同じく〈あごろ〉の斎藤千代さんと若澤さん、〈9条連近畿〉会員の橋本さん、さらに木田さんの友人の岩田さんと、やっと参加者十七名が確定したのが八月中旬頃のことであった。

この間いろいろな出来事があり、この号の「あごろ読書室」に紹介文を書かせていただいた竹内治一医師のご長男も急きよ参加をしてくださることとなり、男性七名女性十一名、合計十八名の参加者が決定、坂井先生に団長をお願いした。トラベルアイの西島さんも添乗員として行ってくださることになり、デジカメの撮影を引き受けていただいた（その写真を帰国後すぐにプリントアウトしていただいたので展示に役にたった）。西島さんにとっては初めての平和ツ

ア―で、途中から添乗員兼お仲間として加わってくださった。

長谷川テルの着物

六月に日頃から平和運動でおつきあいのある保険医協会の雑誌の座談会に、暁子さんと木田さんを紹介したのが縁で、その座談会の端に私もだまって座らせていただいた。竹内医師の司会で、京都大学に客員教授として留学されているハルピンの黒龍江省社会科学学院の、笄^だ志剛先生が加わられ、「日本と中国の戦争と交流」の話になった。

その時、八月に東北烈士記念館の副館長が来阪されると聞いていた。暁子さんに「テルの遺品を提供してほしい」と依頼された。暁子さんは大切な母親の着物を贈呈されることになった。この着物は暁子さんが初めて日本に来られたときに、叔母さんから「お母さんの形見の着物」として貰われた大切なものである。これはぜひ伝えたい話なので、この号の巻頭言を書いていただいた岩垂さんに相談したら、大阪朝日の若い記者を紹介してくださり、記事になることが決まった。八月十三日、盆休みに取材したいと連絡があり、急きよ坂井先生の事務所に暁子さんが着物を持って来られ、撮影することになった。しかし、今までマスコミの勝手な報道に困らされていた暁子さんは「絶対に写真はいや」と言われる。着物だけというのも変なので、坂井先生と私が写ることになった。

この記事が十六日の朝刊に大きく掲載され、朝日新聞に問い合わせが多くあり、坂井先生の事務所や私の所へも電話で問い合わせがあり、長谷川テルのことを知る人が増えたのは有難いことであつた。またこの記事は、asahi.com 朝日国際版にも掲載された。

八月二十九日、東北烈士紀念館の副館長が、〈ピースおおさか〉を訪問されることになったので、有元さんのご尽力でこの時に着物の贈呈式をさせていただくことになった。お母さんの大切な着物を手放す暁子さんの心情を思い、贈呈の前に袖を通して貰った。色の白い暁子さんにとってもその着物は似合っていた。きつとテルさんは母親として喜んでおられるだろう。いろいろな人の巡り合わせにより、テルの着物が東北烈士紀念館に展示されることになった。

再度の中国訪問

前述の竹内治一医師の『赤い夕陽と黒い大地』がハルビンで出版されることになり、お誘いをいただいたので、「長谷川テルを辿る中国の旅」から帰国後、もう一度中国へ行くことにした。先の旅は事務局をして、精神的に非常に疲れたので、今度はのんびりしたいと、西島さんに飛行機と宿の予約を取って貰った。一人ではちよつと心配なので、カメラマンの息子を誘い十月二十六日大連へ着いた。また木田さんに通訳をお願いして二泊大連に泊まった。旅順、二〇三高地などの戦跡を見学した。

二八日にハルビンの黒龍江省社会科学院で竹内先生の一行と合流した。この日は『赤い夕陽と黒い大地』の出版記念とこの著作による功績と、竹内先生が以前から中国東北部の要塞調査に取り組んでおられたことへの功績が認められ、黒龍江省社会科学院から名誉研究員（名誉教授）の称号も同日授与された。

翌日、笈志剛先生の案内で再び七三一部隊侵華罪証陳列館を訪問した。館内の説明を聞いた後、先の旅では見ることでできなかった、外にある当時の建物や壕も見学できた。一緒に説明

を聞いていた日本の訪問団の人たちが壕の前で献花をされていた。その献花に岡山県と書かれてあったので、「宜先生」と声をかけたら、岡山の宗教家の方たちで、名詞を交換した。宗派を問わず「平和と人権」を守る運動をしておられて、竹内先生の故郷が岡山であり、不思議な縁だということで、帰国後竹内先生は本を贈られた。

続いて東北烈士記念館も訪問。長谷川テルの展示をゆっくりと見た。中国での通名「緑川英子」の横に（長谷川テル）と書いてほしいと坂井先生が願っておられたので、副館長に木田さんに通訳をしていただいてお願いした。今改装中なので、新しく展示変えをしたときはそのようにするとお約束をいただいた。同行された菊地実・関東軍国境要塞戦跡研究会代表の話によると、来年八月東北烈士記念館の展示品展が、京都の立命館ミュージアムで開催されるようである。ひよつとすればテルの遺品も帰国して、展示されるかも知れない。

テルの意志を継いで

十月五日、大阪の憲法九条を運動の柱に据えている三団体（憲法会議・大阪、憲法九条の会・関西、9条連近畿）が合同で有事法反対の集会を開催された。ここで私は「長谷川テルを辿る中国の旅」の報告と旅の写真の展示もさせていただいた。会場にテルの母校奈良女子大の学生が来ておられ、テルが奈良女子高等師範を退学させられたことに憤慨し、「そのようなすばらしい先輩がいたことに感激。十一月の学園祭に『あごら』二五三号の販売をするので」と注文まで貰った。テルと娘暁子さんの後輩の学生たちに知っていただいたことは、これも非常に嬉しいことであつた。

こうして長谷川テルは少しずつ皆さんに知られるようになった。テルの研究家の利根光一氏も、『望郷の星』の脚本を書かれた岩間芳樹氏も亡くなられた。どこの空港であったか、宮崎さんが、他の団体の女性たちに「私たち長谷川テルの墓参に行きましたのよ」とテルのことを説明したおられる声が聞こえた。『9条連ニュース』九五号に田村豊さんが「長谷川テルの魂にふれて」、荻澤礼子さんが『軍縮問題資料』二〇〇三年一月号に「長谷川テルの墓を訪ねて」として寄稿文を書いてくださった。特に若い方が語ってくださることは非常にうれしい。参加してくださった人たちがそれぞれにテルを語ってくださるだろう。そして今回のこの特集が発行できたら、もつと多くの人たちに知ってもらえるだろう。私は仕事の余暇に多くの時間をさいて運動したが、一次的な役割は終わったと思う。

私は長谷川テルを語るときいつも「失くしたふたつのリンゴ」の詩を参加者のどなたかに読んでいただく。なぜ私が読まないか？ それは、私が泣き虫で何度読んでも涙がでるから。今回もどなたかに墓前で読んでいただこうと思つて用意をしていたら、バスの故障で木田さんにお願ひすることになった。プロの頬にも感動の涙がつた。この詩のリンゴを二つ、私は旅行バッグの真ん中にそつと大切に入れて日本から持つて行き、墓前に供えた。テルさんの頬を赤いリンゴの色に戻してあげたかったから。私には墓前で、の暁子さんの顔にテルさんの顔が重なり、ほつとされたお母さんの顔が見えた。もう私はこの詩を朗読するとき涙は出ないだろう。

佳木斯の劉仁・テルの比翼の墓地は、劉仁は故郷本溪を、テルは日本の方向に向けてであると聞いていた。お二人は深い愛で結ばれて平和を望み、短い命をこの地で終わられた。碑文に刻まれている「国際主義戦士」とは、中国では、中国人民と共に闘った外国人に捧げる最高の称

280号



大阪発

長谷川テルを辿る旅



(長谷川テルと夫 昭仁、1926)

今こそ長谷川テルの勇氣に学ぼう

岩垂 弘

長谷川テルの軌跡を辿り戦争阻止の誓いを新たに

坂井尚美 有光幹明 岩田淑子 竹内 康 田村 豊 橋本幸子

長谷川 聡子 戸澤礼子 西沢東洋子 太田日奈美 西村理芳 宮崎和子

宮本美次 宮原 達 山口朝枝 斎藤千代 西島善治 澤田和子

あごら280号
(2002年12月)

号である。いまもあのすばらしい景観の中で、世界の平和を望んでおられるだろう。この感動を大切に平和な世の中の実現をめざして力を合わせて運動をしましょう。

「長谷川テルを辿る中国の旅」に参加された十八名の方、ありがとうございます。この号の発行することに決まり、また、皆さんに無理なお願いをして申し訳なく思っています。皆さんの文章を読ませていただき、「長谷川テル」のことを深く知っていただいたこと、これからの平和運動に役立つ旅であったことを確信しました。暁子さんご苦労さまでした。

二〇〇二年十二月八日

(あごら大阪 9条連近畿 夕陽丘女性史グループ)

ぐるーぶ紹介 ①

戦争を許さない女たちのJ R連絡会

この会は、J R総連の女性組合員、書記、家族で構成されている。それぞれの会が自主的に活動するグループの繋がりで、労働組合の縦系列だけではなく、ちよつと違う色合いも兼ね備えている。家族が中心のグループ、書記が中心のグループもある。

そして年々広がりができ、組織内では女性協議会も一緒に参加するようになっていゝる。各地方ではそれぞれのグループが地域の仲間と連帯しネットワークをつくつていゝる。

その始まりは、一人の女性が「いのちを育む女性が、いま、何かやらなければ！」と提案したことがきっかけだった。ときあたかも小沢調査会が改憲論議を巻き起こし、連合山岸会長が「憲法見直し」を発言していゝる。

た。まず東京で「エンジェル」が結成され、その後「星砂の会」(J R西労)が結成された。

そして一九九三年十二月に全国のグループを結ぶものとして「戦争を許さない女たちのJ R連絡会」が結成され、翌年一月には、「広げよう九

条と平和のこゝろ 女たちのピーストレイン」といゝる平和集会を開いたが、多くの反対のなか、小選挙区制法案は国会を通過した。そしてさらに「ななかまどの会」(J R北海道労組)、「おりづるの会」(J R東海労)、「青空の会」(J R貨物労組)、「ロザリオの会」(九州)など、つぎつぎとやさしい名前のを結成するなど、「労組」のイメージとはひと味違ふユニークな活動を展開していゝる。

昨年の9・11以降は、九月二十日に平和集会を開き、「テロにも報復戦争にも、日本の参戦にも反対」要請書提出、国会前座り込み、有事法制反対のデモ、アフガニスタン難民支援のためのチャリティーコンサート、パキスタンでの難民支援活動、「慰安婦」問題の早期解決のための署名集め、などなどのさまざまな取り組みを続けている。

たとえば「エンジェル」は、五月の有楽町マリオン前のリレートーク以来、駅頭での有事法制反対のピラ配りとトークを月一回続けるなど。各地域では、いろいろバラエティーに富んだ平和活動をして、「いのち輝く」といゝるミニコミ紙を二か月に一度発行していゝる。

イラク危機が深まるいまは平和の連帯が更に必要なとき、彼女たちほもつともつと輝いて、平和運動の中心になられるだろう。(澤田和子)

キリスト教会のセクハラ・人権侵害裁判に関わって

澤田和子

セクハラという言葉はもう日常語の一つになった。それだけ根が深く幅も広いことだろう。最近、セクハラ裁判も、訴えればほとんどが勝訴する時代になったが、勝訴しても、被害者の心身の傷は、いやされるだろうか。私が支援を続けているセクハラ事件の裁判について感じたことを述べ、読者の意見・異見を仰ぎたい。

〔事件の概要〕

キリスト教に惹かれて大学でキリスト教を選び、将来の指導者を目指して一九九八年三月、日本基督教団熊本白川教会（以下、白川教会）の職員となったA子（原告・二十代）は、就職後、牧師B（被告・五十代）の指導

を受けることになったが、Bから連日、執拗なセクシュアル・ハラスメントを受け、二〇〇一年三月、ついに退職、同年四月、Bを相手どり、一、一〇〇万円の損害賠償請求訴訟を神戸地裁尼崎支部に提訴した。現在、訴訟は最終弁論を終わり、判決を待つばかりとなっている。

この間、A子を支援する（熊本白川教会のセクハラ・人権侵害を糾す会（事務局・熊本県））も出来、判決は勝訴することが期待されているが、この裁判を通じ、同教会は、一貫して被告を弁護し、教団も被告の言動を黙認した結果、原告も、その家族も、さらに心身の傷を深くした。その詳細は下記のとおりである。

BはA子の就職直後からA子に対し、事務室ばかりか、

礼拝堂などでまで、二人きりになると体のあちこちに触れ、「妻とは愛のない結婚をした。若い女性を長い間抱いていない」と語り、原告のアパートに夜な夜な電話して、卑猥な話を続けた。二〇〇〇年夏に退職の意思を示すと、「辞めるのなら後任の女性の写真を見せよ。自分が抱きたいと思う女しか雇わない」とまで明言した。

Bは、これらの言動が教会内で漏れることを恐れ、A子に対し、「教会の人と交わるな」「意見は言うな」「奴隷になればよい」などと命令し続け、「牧師を疑うのは信仰が足りないからだ」と思うように仕向ける一方、人前で怒鳴りつけて恐怖心を植えつけ、抵抗ができないようにした。

A子のほか七人の女性も同様の被害を受けていたことが、裁判で明らかにされた。A子は、キリスト教教育主事(DCE)になるのが夢。推薦状は牧師が書く。Bに積極的に立ち向かったA子はDCE資格試験の日程を伝えてもらえず、受験の機会を奪われた。

このような状況のなかで、A子は、悪夢、不眠、食欲不振、倦怠感、微熱などPTSD(心的外傷後ストレス障害)で苦しみ、転職先も一年後に失業した。今年四月、

法廷で証言した医師は、「完全に回復するにはあと二年はかかるだろう」と証言している。

〔Bと教会側の反発に憤るA子側〕

一方、訴えられたBは、「自分に反感を持つ白川教会の伝道師がA子をそそのかしたでっちあげだ」と反論。

また、〇一年二月、A子の訴えを受けた白川教会幹事会は、「Bのセクハラはなかった」と断定して訴えを退けたばかりでなく、「伝道師によるでっちあげ」とBを擁護した。

一方、白川教会の所属する日本基督教団の地方組織「九州教区」は、調査小委員会を設けて調査した結果、事実を認定し、Bに辞任勧告するとともに「牧師辞任に向け適切な措置をとるよう」白川教会に要請したが、Bと教会は、「調査は不当」と反発した。Bは二〇年以上も白川教会に在籍している。

九州教区はBに対する処分(教団では「戒規適用」という)をも教団本部の教師委員会に申請した。これを受けて教師委員会の委員長と書記はA子の実父から〇一年

一〇月、事実経過と原告の被害実態を一時間四〇分にわたり聴取、父親は医師の診断メモも手渡したが、委員会は翌十一月に、「処分見送り」を決定した。理由は「裁判係争中であり、一方への加担は、裁判への干渉になる」であった。

キリスト者が見のがしてよいのか

提訴の前に、Bは父親に電話で謝罪したが、後に周辺の人びとに、「父親に電話したところ、父親が非を詫びた」と全く逆の話をつくりあげて宣伝した。このような白黒逆転の言い方は裁判での反論にも出てくる。

教団側の対応を見ると、九州教区は事実を認定し、教団本部にBの処分を求め、兵庫・京都・神奈川の各教区総会も、原告支援及びセクハラ問題の取り組みを推進する建議を採択したが、教団側は今日まで、Bを処分せず、A子に対する謝罪さえ行っていない。

キリスト者、しかもそのかがみとなるべき牧師の、道にはずれた行動は、教団として深刻に受けとめ、迅速に対処せねばならない問題のはずだ。イスラム教であろう

と、仏教であろうと、信仰を説く立場の人間は、在家人に比べていっそう重い責任を負わなければならないとされている。

責任者の監督責任は

セクハラで訴えられた横山ノック大阪府知事(当時)は、「選挙の対立候補の策謀だ」と言い、矢野暢京都大学教授(当時)も、「学内の対立相手の策謀だ」と述べて、男女間の問題を男同士の問題にすりかえ、被害者隠しを図った。Bの反論も同じだ。

「南京大虐殺や従軍慰安婦はなかった」と固執する一部の日本人の存在は、アジア諸国の怒りをいつまでも消えないものにさせている。「キリスト者であるからこそ、いさぎよく事実を認め、謝罪してほしい」と願うのは、筆者だけではあるまい。処分や謝罪の回避は、被害者のPTSDを悪化させるばかりである。

本件は、本来、裁判で決着するものではない。A子の場合、三年にわたる執拗なセクハラにも、断固、抵抗を貫いたことが、提訴を可能にした面はあるが、その代償

としてのPTSDのいたましさは格別である。仮に損害賠償が全額認められたとしても、金で心身が回復するわけではない。この裁判を支援し続けてきた一人として、
ご意見とご異見の二一報をすべての読者にお願ひする。

【参考資料】

この裁判に関しては、A子を支援する市民を中心に、九州教区に賛同する教区やその他のキリスト者たちで、いくつもの支援グループがつくられた。結審後の九月一日、その支援グループの共催による集会、「完全勝利に向けて！ 関西集会」は、大きな盛り上がりを見せた。当日の集会宣言と、訴訟の年表を掲載する。（あこら287号 2003年9月）

《集会宣言》

二〇〇一年四月二三日に提訴されたセクシユアル・ハラスメント訴訟は、本年七月一日の第一〇回審理をもって結審し、一〇月七日に判決を迎えようとしています。

私たちは、原告が勇気をもって提訴した、このセクシユアル・ハラスメント事件を私たちが取り組むべき課題として受け止め、教団性差別問題特別委員会、九州をはじめとする各教区、市民グループなどにおいて支援体制を立ち上げ、裁判を傍聴し、毎回の報告集会を行ってきました。また、各教区・グループにおいてはセクシユアル・ハラスメントに関する学習会やパンフレットの発行など、遅きに失したとはいえ、この課題に対する取り組みを行ってきました。

このセクシユアル・ハラスメント事件は、キリスト教会の女性信徒に向けられた男性牧師による二年以上もの長期にわたるセクシユアル・ハラスメント（性的いやがらせ）でした。ここには、女性に対する男性の優位性、更に、信徒に対する牧師の優位性など、何重もの差別意識、差別構造が存在します。セクシユアル・ハラスメントが性差別であり、人権侵害であることはすでに明らかですが、キリスト教会もまた、他の社会と同様に差別を克服することのできない一組織形態であることを私たちは今改めて確認します。そしてその克服に向けて今後 私たちは最大限の努力をしていかなければなりません。

今日ここに参集した私たちは、教会におけるセクシユアル・ハラスメント克服への決意を新たにするとともに、一〇月七日に行われる、この訴訟の判決が、原告の受けた被害に則して正当な判決となるために、以下の点を訴えます。

一、私たちは、この訴訟の判決が、被害を受けた原告の心情・立場に寄り添う観点から行われることを求める。
一、私たちは、この訴訟の判決が、セクシユアル・ハラスメントにおける構造的性暴力の問題性を見据えた観点から行われることを求める。

二〇〇三年九月一日

裁判支援集会「完全勝利にむけて！ 関西集会」参加者一同

憲法九条は世界の宝。多様な運動をつないで護り抜きたい

澤田和子

一九九九年にオランダハーグで開催された世界市民平和会議で、公正な世界秩序のための一〇の基本原則の第一に、『各国議会は日本国憲法第九条のような、政府が戦争をすることを禁止する決議を採択すべきである』と決議された。

この、世界に誇る憲法九条が無視され、イラクに武器を携えた自衛隊が派遣されることとなった。今こそ力をあわせ、思想信条過去のいきさつにとらわれず、憲法九条を守ることを一点にしばって、大きな運動をしなければならないと思う。

大阪では、昨年より憲法九条を運動の柱にしているグループが、集まって活動をしてきた。共産党系『憲法会議・大阪』一般市民『九条の会・関西』新社会党系『憲法を生かす会・大阪』社民党系『護憲・大阪』と私の参加している一般市民と労組の『9条連・近畿』の憲法五団体で、大きな集会を重ねてきた。集会後の懇親会は、みんな仲良く楽しい運動をめざして和気あいあいの雰囲気である。

今年は三月一二日（金）一八時、すまいの情報センターホールで「きくちゆみさんの講演と音楽」を開催する。次にもっと多くの平和団体に呼びかけ、「御堂筋平和パレード」を目標にしている。全国で一斉にこのような取り組みができないものだろうか。いま「長谷川テル」の勇気を持ちたい。（あこら大阪）

（あこら291号 2004年1月）

小雨の上海 霧の重慶

澤田和子

二月のある日、木田日登美さんから、「三月初めから一か月間中国に滞在するので、重慶に行きませんか。案内しますよ」と電話があつた。すぐに坂井弁護士、長谷川暁子さんに連絡、「行こう!」ということになった。テルが一九三七年に劉仁を追つて中国に足を踏み入れたのが上海であつたので、ぜひ上海の波止場にも行つてみたいと思つた。急ぎよ暁子さんと旅行社に出かけ、大阪→上海、上海→重慶の往復の切符と上海のホテルの予約を確保。あとは現地に着いてから。

昨年一月に〈中国の近・現代史を学ぶ会〉(代表・廣幡和子氏、あこら会員)のお招きで、「Gネットしが・フェスタ」で「長谷川テル」を語らせていただいた。その縁で講師の吉田曠二氏(歴史研究家・朝日新聞社OB)と知り合つた。この方が同時期上海に滞在されることになっていて、「上海に来ませんか。魯迅紀念館を案内します」と連絡をいただいていた。「テルの旧居を訪ねる」「魯迅紀念館を訪問する」二つの目的で出発した。

小雨の上海

小雨が降りそぼる上海の街、テルの住居があつた元フランス租界周辺を歩いた。一九九二年にエスペランティストの城千枝さんが訪問されたときの文章「フランス租界の故居は、広く静かな街路と槐の街

路樹の続く街路区に建ちならぶ、三階のアパートでした」と周辺の地図と坂井先生のコンパスをたよりに、あちこち探したが見つからなかった。しかし、このあたりであることには間違いない。

今日も小雨。『望郷の星』のシーンを思い出しながら、「テルさんはこの路地を歩いたのだろう」と感慨にふける。旧居の見つかからないまま、テルに反戦放送を勧めた郭沫若の旧居や孫文紀念館などを見学。

その後、魯迅紀念館を訪問。再現されている上海・内山書店など丁寧な案内をしていただき、館の職員の方に夕食までご馳走になり、友好を深めることができた。

帰国後、吉田氏著作『魯迅の友 内山完造の肖像』を読んだ。テルと同じく日本人として、戦前の中国で魯迅を助け、日中の友好につとめられた内山完造の偉大な生涯を知ったこと、吉田先生の長年の研究成果と友好のおかげで私たちを歓待していただいたのだと思ひ、感謝。嬉しい出会いであった。

ホテルで従業員にインターネットで「長谷川テル」を検索してもらった。多くのデータがあり、その中に一昨年の私たちの訪中も記載されてあった。

霧の重慶

重慶は、以前木田さんが訪問されている、紅岩革命紀念館を見学。「きっと何かが見つかる」と期待をしながら広い館内を巡っていると、突然暁子さんが、「父(劉仁)の写真がある」と、大きな声。背の高い劉仁が、郭沫若の隣に写っておられた。

詳しく聞こうと事務所に行った。館長助理の劉立群氏と、もう一度写真の展示してあるところに戻り、暁子さんが感動を語られた。「詳しい資料があるので」と、資料室に行き、後日コピーを送っていただけ

ることになった。この劉氏は『望郷の星』の撮影のとき現地におられ、その場所を知っておられるので、午後案内してくださることとなった。

深い山の中の道をタクシーで長時間走り、頼家橋の「重慶郭沫若旧居国民政府軍事委員会政治部第三庁跡」と書かれた所に着いた。門の左側に銀杏の木があり、古い手入れのされていない建物があった。「栗原小巻さんが撮影のとき何度もこの入り口から出入りしていた」と。おそらくこの部屋にテル夫妻が住んでいたであろうと案内された。

かなり大きな部屋であった。暁子さんは一人で部屋の真ん中に立ち「ここで兄劉星が生まれ、母が子どもを育てながら、文章を書いていたのだらう」と感慨深げに話された。

テルが発信したエスプレントの文集などの多くは、この場所でタイプされたものであろうか。私がいつも涙ながらに読む『失くした二つのリング』もこの場所で創られたものであろう。予定をしない旅であつたが現地の人たちの善意に助けられ、暁子さんとテルを思う同行三名は、この地を訪問できたことに新たな感動を覚えた。

帰り道に重慶博物館を訪問。資料の中に「緑川」の署名を見つける。目立たない小さな字であつた。やせたテルの、心細そうな表情の写真も見つかった。この博物館の方がたの好意で、これらの資料のコピーも後日送つていただいた。

もっといろいろなことを話したいので、夕食をこ一緒にとお誘いし、私たちのホテルまで来ていただいた。暁子さん、木田さんと中国語を話される方が二人もおられるので、楽しい会食ができ、ささやかな日中友好ができたと思う。

重慶で最後の夜だった。女性三名は、テルの旧居がわかったので興奮して長い時間おしゃべりをした。

女三人の共通点は、三人とも若い時代に両親と別れていること。木田さんと私は苦勞し育ててもらった母のことについて語った。自分を犠牲にして働き続けた私の母。長い苦勞の年月に比べれば、今の私はなんと幸せであろうか。その母の三三回忌は今年七月である。

暁子さんだけは「自分の知らない有名なお母さん」。母親の実像を知っておられない。おつきあいが始まったころ「テルのことを話せと言われても私はしゃべれない」と抵抗した暁子さん。あの廃屋こそ生きていた母の姿が想像できた唯一の場所であつたろう。

帰国後、暁子さんからいただいた手紙に「母の重慶時代の写真を見ると、父と一緒に写っている幸せそうな母とは、別人のように見え、心細そうでやつれはてた様子でした。いつまで続くのかという行き先がまったく見えない状況のなかで、仕事に悩み生活に苦しんだ母のことを想像すると、胸が哀しみでいっぱいになりました」と書かれてあつた。

再び上海へ

翌日木田さんは北京へ、三名は深夜に上海へ戻る。

翌日、上海の港付近を散策。テルが夫・劉仁の出迎えを受け、中国への第一歩を踏み出した港である。祖国日本へ再び戻ることができない、厳しい旅の始まりの港であつた。

午後、暁子さんに送られて坂井先生と上海空港より関空へ。

残された暁子さんは、再び上海の旧居を訪ねて歩かれた。「町の自治会と派出所で調べたが、テレビの撮影班の来たことを覚えている年配の人にも会つたが、『建物は取り壊されたが、雁蕩路六九号にはテル

夫妻が確かに住んでいた』という。彼の両親が重慶南路にも住んだことがあり、そこで魯迅の教え子の女流作家と同居したことがあるようだ』という話も聞いた。(この女流作家との出会いは吉田先生が調べてくださいるだろう?)

感謝をこめて

一九九一年に木田さんの紹介で暁子さんと出会い「長谷川テル」を知り、坂井先生のご協力で、その短い人生を追いかけて一三年の歳月が過ぎた。知れば知るほど偉大なる人柄に私はのめり込んでいった。大阪市立婦人会館で短い期間「日本近代女性史」を学習しただけの私。いもづる式にテルにかかわった人たちに会った。その方たちの好意で多くのことを学ばせていただいた。自分のライフワークが持てたことに喜んでいる。今回の旅では廣幡さんと吉田先生。そして重慶や上海の記念館の方たちに、たいへんお世話になったことを感謝する。

テル夫妻が反戦平和を願い命をかけて中国各地を生活した足跡を、ただ一人残された遺児暁子さんと追いかけた旅に終止符を打つ。劉仁、長谷川テル夫妻の深い愛を重慶で確認できた。大きなことが終わった安堵感と、少しさみしい気持ちが入り交錯している。

私は、今もあちこちで「テル」を語らせてほしい、と声をかけている。現在の日本の状況を、テルさんはどんなに悲しんでおられるか! もっとたくさんの人たちに知ってもらいたいと思う。テルの平和への思いを大切に、この勇気をこれからも伝えたい。

ことし名古屋で長谷川テルの朗読劇が開催される。また、木田さんが演劇の脚本を書いてくださると

いう。嬉しい広がりである。

テルに関する貴重な資料がたくさん集まった。それらの保管と閲覧のできるところが必要と思う。

中国ハルビンの東北烈士紀念館のように、日本においてもそこに行けば長谷川テルのすべてが見られる場所がつかれないだろうか？

一三年間にテルにかかわりのある多くの方がたに会い、教えと援助を受けました。その方たちのお顔を思い出しながら、お一人お一人のお名前を記さないまま感謝を申し上げます。『あごら』で三冊の特集号を発信できたことも「謝々」。

二〇〇四年五月二六日 大阪にて

(あごら296号 2004年7月 あごら大阪発)

朗読劇『売国奴と呼ばれても』と音楽の集い

「お望みとあれば、私を裏切り者と呼んでくださっても結構です。私はこれっぽっちも怖れはしません。」

「日本の兵隊さん。あなた方は真実をご存じないのです。海のこちら側に、あなた方の敵は、いないのです。」日本兵のむなしい「戦死」も、中国民衆の無惨な死も悲しみ、それを回避するために命をかけて《重慶ラジオ》で放送し続けた長谷川テル。その生き方を語る朗読劇『売国奴と呼ばれても』（作／栗木英章 演出／舟木 淳）を、名古屋市長東文化小劇場で公演します。12月3日（金）午後2時、午後6時30分の二回です。ぜひご来場を。

しなやかに問い続けて **あゝ 300号**



一人ひとりが小さな努力を 大阪 澤田 和子

一九八二年、大阪市立婦人会館で近代女性史を学習中に、二四号『女と戦争』を読んで感動し、会員となり、大阪で合評会に参加。以来、大阪発の号のお手伝いなどをした。特に長谷川テルの掘り起こし特集の三冊は、私にとって貴重なものであり、また全国のメイトと友人になり、うれしいふれあいが出てくることにも感謝している。

今このメッセージを書くにあたり、『女と戦争』を開いて見たが、当時と少しも変わらない『あゝら』の編集姿勢に、あらためて敬意を表する。

300号に想う

『あゝら』が継続されることになった今、財政大窮乏をどのようにささえるかが問題である。三三年ということは会員も三三歳年をとったこと。年金生活者も多いと思う。私も会社を退任したので、今までのようにたくさん購入はできない。一人ひとりが年間二回ほど、自分がよかったと思う号を一冊余分に購入して友人に薦める。これぐらいしか思いつかないが、会員の少しの努力で『あゝら』を支えられるのではないか。

「しなやかに問い続けて300号」

(あゝら300号 2005年3月)

の中の〈300号に想う〉より

日中友好と憲法九条——8・15中国青島大学にて 澤田 和子

二〇〇五年八月一四日から一七日まで、青島大学で「郭沫若と中国知識人・文化人たちの抗日戦争・民族解放戦争における文化選択」のシンポジウムが開催された。

主催は郭沫若記念館と青島大学。長谷川テルの研究を続けている縁で、坂井弁護士・木田日登美さん、私の三名が招かれ、（テルの長女暁子さんはカナダの娘さんのところに行っておられ参加できなかった）。一五日に研究発表、終戦六〇年の節目を中国青島で迎えた。

この日は市全体が抗日戦争勝利六〇年のムードに包まれ、テレビは、日本軍がいかに残虐なことをしたか、日本陸軍軍服の兵士がドラマに、歴史の検証に現われ、新聞も南京大虐殺の写真などを大きく掲載、靖国神社に参拝した国会議員の名前も詳しく書かれていた。日本人として肩身の狭い日であった。

シンポジウム発表者は、中国の各大学、韓国、ドイツ、日本の教授。一五日に坂井弁護士が登場した。タイトルは「長谷川テルと郭沫若先生。その旧跡を訪ねて——日本におけるテル研究の状況」。前もって論文やテルに関する写真や年表は長谷川暁子さんが中国語訳をして送り、通訳を木田さんが担当。坂井先生は「日本人にとってテルの存在が限りなく大きいこと、侵略国の日本人が、みなさんの前でお話しができることに、まず感謝。郭沫若がテルを援助し、日本語の反戦放送に従事し、エスペラントで、侵略を世界に発表できたこと」などを語り、一人の日本人として中国を侵略したこと、を詫びられたとき、大きな拍手が起こった。さらに敗戦後の日本が侵略を反省し、日本国・憲法九条

「希望の灯をともしよう」

齊藤美栄子さんのニューヨーク会議
リポート、すばらしかったですね。

新聞記者のリポートとは違った民間人の感性のあふれたルポ。ニューヨークの町に生きる人びとと、CSWの会議が見事につながっていて、感動いたしました。

ができ、その後六〇年の今日まで戦争をしなかったことを述べ、「照子は『売国奴』という烙印を押されたが、これこそいかなる日本人も得ることのできなかった勲章なのである。」（澤地久枝）「いま一度テルの精神をふまえて、非戦平和のためにあらゆる努力をしなければならぬ時を迎えていることを痛感している。」（土井たか子）と、お二人の言葉を結びとされると、満場から再び大きな拍手があり、座長より謝意が述べられた。

晩餐会でも九条のことが話題になった。私たちは九条連のバンダナを配り、「憲法九条を守るだけ」ではなく、世界に発信をしなければならない」と強く決意した。（大阪府）

(あ) 303号 2005年11月

(大阪府)

小俣光子さんの北京ルボも、この媒体にも載っていなかったリポートで、さすが『あこら』と思いました。ただ惜しまれるのはこのすばらしいルボが、もっと早く載ればよかったのに、と残念です。（大阪 澤田和子）

(あざら305号 2006年3月)



「戦争の原体験」から

長谷川テルの顕彰に集中

澤田 和子

一九三九年大阪生まれの私にとって、戦争の体験は、空襲警報が鳴ると自宅の裏庭の防空壕に入っ
て寝てしまい、起きると誰もいなくて泣きながら家に入ったこと。大阪大空襲で、通っていた幼稚園
の講堂に焼夷弾が落とされ、休園になったこと。淀川の向こう岸が焼け、近所の子どもたちと一緒に
焚きものにする木を拾うため焼跡に行って、柱の下敷きになっていた片足を見て怖かったことぐら
いしか記憶がない。

二五年前に大阪市立婦人会館で「近代女性史」を学習後、〈夕陽丘女性史グループ〉を結成。「女性
と平和の問題」を柱にして学習と運動をしてきた。過去の侵略戦争の加害と被害の歴史を学び、戦争
の悲惨さを知り、平和の大切さを知った。そしてこの学習の資料として買った『あごろ』24号・「女
と戦争」を読んで〈あごろ〉に出会い、〈9条連近畿〉の結成にも参加。今日にいたっている。

反戦エスプレンティスト「長谷川テル」を知ったことから、彼女の生き方に感銘を受け、日頃平和
運動をご一緒させていただいている坂井弁護士や、テルの長女・長谷川暁子さんと共に、中国でのテ
ルの足跡をたどる旅をしたり、『あごろ』でテル特集号を三冊発行していただいた。仕事の余暇にテ
ルの語り部もしている。



あの戦前の厳しい時代に、中国に渡って、中国戦線でたたかう日本の兵士たちに「戦争の中止」をラジオを通じて呼びかけつづけたテルは、「お望みならば、私を売国奴と呼んでくださってもけっこうです。決しておそれません。他国を侵略するばかりか、(罪もない難民の上にこの世の地獄を平然と作り出している人たち」と、同じ国民に属していることのほうを、私は、より大きい恥としています」と、自分の生命をかけて訴えつづけた。この勇気を忘れてはならない。

今、日本は右傾化が強く、世界に輝く憲法9条を変えようとする動きが大きくなっている。「9条を変える」のは「戦前」に戻ること。「戦争をする国」になること。私は、テルのように、からだを張って、憲法9条を守る運動を続け抜く。

(あこら309号 2007年1月)
(大阪府 会社役員)

今こそ思い起そう 長谷川テルの生き方

―反戦エスぺランチストの勇氣に学ぶ―

『軍縮問題資料』（2005年8月号）

澤 田 和 子

《お望みならば、私を売国奴と呼んでくださっても結構です。誤って血を流さないで。あなたたちの敵は海のこちら側にいませんよ》長谷川テル。

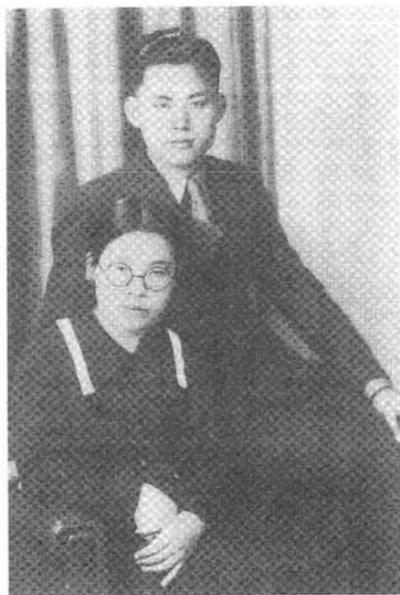
このことばをご存じでしょうか。日中戦争中、中国の地で日本の侵略戦争を憎み、日本兵向けに反戦放送をした女性、長谷川テルのことばである。

これに対し、日本の都新聞（一九三八年一月）一日付）は《嬌声売国奴の正体はこれ 流暢・日本語を操り 怪放送祖国へ毒づく 赤くづれ長谷川照子》と書きました。

長谷川テル（中国での通名は緑川英子、エスペラント名はヴェルダ・マーヨ）とはどのような女性であったか。テルは明治が大正に変わる一九一二年に生を受ける。父親は東京市の技師、母親は文学を愛する女性。父親の

勤務の関係で関東各地を点々として東京に転居。東京府立第三高女に進学。語学にすぐれ、文学に興味を持ち、多くの書籍を読んだ。この読書で多くの知識を得て男女平等の思想を知った。父親の男尊女卑的な考えと、それに追従する母親の態度に反発した。

奈良女高師（現奈良女子大）に進学し、長戸恭と出会い、親友となった。文学に興味を持ち、研究テーマに「堤中納言物語」を選んだ。のちにこれをエスペラントに訳している。短歌グループにも属し、短歌や短い文学作品などを校友誌に書く。世界共通語エスペラントを習い始め、「改革者の一人として社会改革をしたい」と思うようになる。が、一九三二年、「八・三〇事件」と呼ばれる、関西地区における左翼団体への弾圧事件に巻き込まれて逮捕され、長戸恭と共に奈良女高師を退学させられた。東京に帰り、タイプとエスペラントを習い、日本エス



長谷川テル・劉仁夫妻の
結婚写真（1936年）

ペラント学会で無給で仕事をした。その中で、エスベラントを創ったユダヤ人医師ザメンホフの「人類の友愛化と正義」の思想と精神に深く傾倒する。『エスベラント文学』創刊に参加し、上海エスベラント協会発行の「ラ・モンド」に「日本婦人の状況」を発表。婦人エスベラント連盟の発起人の一人になる。

エスベラント学会が中国人留学生のためにエスベラント語講座を開いたのがきっかけで、テルは劉仁（中国東北遼陽近郊生まれの官費留学生・東京高師現筑波大）と出会う。芝居を見たりするなど交際が続き、愛が芽生えた。

劉仁をはじめ当時の中国からの留学生のほとんどは、祖国の独立と解放をめざしていた。自分の進むべき道を模索していたテルは、劉仁から思想的な感化を受ける。

一九三六年、二人はひそかに結婚する。健康診断書を交して記念写真を撮っただけの結婚式だった。父親に相談しても、とても結婚の許可が出そうもなかったからだ。その時、テルは二五歳。が、二人は同居せず、それぞれの家に生活しながら、日本を去る計画を練った。

一九三七年一月、劉仁は抗日救国運動のため上海に旅立った。四月にテルもタイプライターを持ち上海へ密かに出航した。この後、このタイプライターから、彼女の反戦の文章の全てが打ち出される。出航時、家族に災い及ぶことを予測して、自分の持ち物を整理し、日記やノート類などを焼却した。

夫劉仁と再会したテルの見た上海の風景は、ヨーロッパ風の高層のビルとその傍で働いている貧しい半裸の苦力（クーリー）であった。すでに差別に敏感になっていたテルにそれは強い印象を残した。

フランス租界の友人宅で生活を始めた。日本にいた時からのエスベランチストの友人葉籟士と再会し、「上海世界語協会」に入会した。中国と日本との関係がさらに悪化し、七月の蘆溝橋事件を機に日中戦争が勃発し、

上海が陥落する。この頃から国民党の命令で、中国人と結婚していた日本人妻は離婚させられ、日本へ帰国させられた。しかし、劉仁はそれに従わず二人は広州へ。

一九三八年、テルは「日本人スパイ」と疑われ、香港に追放されるが、郭沫若（中国の文学者。後に中華人民共和国総理）の尽力で漢口へ向かう。そして、国民党中央宣伝対日科で、放送を通じて日本兵に日本語で反戦を呼びかける仕事に従事する。日本の都新聞が「嬌声売国奴」とテルを誹謗する記事を掲載、家族に脅迫文が届く。

その後、重慶の文化工作委員会で働く。その重慶に日本軍は無差別爆撃を加える。「生きている兵隊」のエスベラント訳を発行。重慶文化人の会で周恩来（中国の革命家。後に中華人民共和国総理）が「日中両国民の忠実な愛国者」と称賛する。

一九四一年、長男劉星が誕生。文集『嵐の中のささやき』を出版する。『闘う中国』も出版。重慶での五年間に彼女は子どもを育てながら、エスベラント語で多くの文章を書いた。中国での生活の中で一番充実した時間ではなかったか。

一九四五年、中国はついに抗日戦に勝利する。翌一九四六年、武漢へ移る。ここで、劉星が国民党特務機関に誘拐される（六日後に無事釈放）。敵対していた国

民党と共産党の間で停戦協定調印され、一家は南京・上海を経て瀋陽へ向かう。

ここで、長女の劉曉嵐（長谷川曉子）が生まれる。夫劉仁と共に東北行政委員会委員を務める。一九四七年、佳斯木（チャムス）の東北社会調査研究所研究員に任命される。この時、テルは三人目の子どもを妊娠していたが、今後の生活を考え、自らの意思で中絶手術を受ける。が、感染症にかかり、一月一〇日死去。三五歳だった。失意の夫も持病を悪化させ、後を追うように四月に死去。三六歳だった。

彼らが亡くなった後、一九四九年に中華人民共和国が建国された。残された二人の子どものうち長男劉星は叔父に引き取られ、長女曉嵐は革命烈士の子どもとして中国政府の手により孤児院などで育つ。

一九七二年、日中間で国交が回復された。劉星と曉嵐が、自分たちの母親のことを調べてほしいと訴えた手紙を、日本の東京都世田谷区役所に出したことから、テルの遺児の存在が、日本のテル関係者に知られた。テルの姉が訪中し、二人の遺児と対面する。二人の遺児の来日が実現し、やがて、日中関係者やエスベラントたち

の援助で、劉兄妹は日本に留学する。
留学後、劉星は中国で生活していたが、八年前、北京

で三人の男の子を残して死去。一方、暁嵐は一九九〇年から、同志社大学などの非常勤講師をしながら大阪で生活している。一二年前、日本国籍を取得し、長谷川暁子となった。

テル関連の文献としては、一九五四年に高杉一郎氏が『嵐の中のささやき』を日本語に翻訳。六九年には利根光一氏の『テルの生涯』が出た。七二年には澤地久枝氏の『祖国への反逆と愛』。九三年には岩垂弘氏が「遙かなるインターナショナル」という一文（『軍縮問題資料』一九九三年一月号）の中でテルを取り上げるなど、これまでにいくつかの関連書が出版されている。また宮本正男、大島義夫氏などエスペランチストたちがテルの文章を紹介している。

一九八〇年には、テルを描いた日中合作のテレビドラマ『望郷の星』が制作・放映された。テルの役を女優の栗原小巻さんが演じた。

しかし、テルを知っている人はまだ一部に限られ、日本人の中にその名が定着しているとは言えない。

私がテルのことを知ったきっかけは、一三年前、友人の演出家木田日登美さんが中国の大学へ語学と演劇の勉強に行くことになり、自分が留守の間、同じ大学の友人

の長谷川暁子さんの友人になってほしいと紹介されたことだ。「日中の混血児で、有名な反戦エスペランチスト長谷川テルの娘さん」との紹介だった。しかし、この時、私はテルについて何も知らなかった。

私は大阪市立婦人会館で近代女性史を学習したが、その文献にはテルのことは書かれていなかった。その生涯を知りたいと資料や文献を集めた。『望郷の星』のビデオを見たことから、このような女性がいたことに驚き、テルを多くの人に知ってもらいたいと行動を起こした。

まず私の所属する夕陽丘女性史グループの一〇周年記念に『望郷の星』を上映し、そこに長谷川暁子さんを招いた。参加してくれ人たちが、各地でこのビデオの上映会を開催した。

一九九四年二月、大阪国際平和センター（ピースおおさか）に栗原小巻さんを迎えて『望郷の星』の上映会を開いた。栗原さんと暁子さんが、テルのことを話した。会場は満員で、参加者からは日本軍の通信兵として重慶でテルの放送を聞いたとの発言があった。

二〇〇二年は日中国交正常化三〇周年にあたった。この年の夏、暁子さんを中心に坂井尚美弁護士、木田さん、私など一九名で、テルの中国での足跡を辿る旅をした。暁子さんがテルの着物を東北烈士記念館に寄贈されてい

たので、一行はこの記念館を訪問した。「緑川英子」のコーナーに、写真などとともにその着物が展示されていた。

終焉の地、佳木斯市には九月一八日に着いた。中国のマスコミが「革命烈士の遺児が『九・一八事変』の記念日に当地を訪問」と大きく取り上げた。

ここでは、墓参をした。墓地はダム湖のそばの小高い丘の上にあった。墓は比翼塚で、テルのは日本の方向、劉仁のは故郷の本溪に向いていた。みんなで心を込めて献花し、合掌した。碑文には「国際主義戦士」と刻まれていた。この称号は中国では中国人民と共に闘った外国人に捧げる最高の称号である。佳木斯市役所が管理し、子どもたちが清掃をしているとのことだった。

その後も、曉子さん、坂井弁護士、木田さんと私の四名でテルの研究を続けている。昨年は上海・重慶を訪問。上海の旧フランス租界付近でテルの旧居を探したが、取り壊されたらしく、わからなかった。

重慶では、まず紅岩革命記念館を訪問し見学した。曉子さんが突然、大きな声で「父がいる」と叫んだ。劉仁が郭沫若と写っている写真が展示されていたのだ。記念館の事務所に寄り、こちらの身分を説明すると、劉立群氏が応対してくださり、テルの遺児の訪問を大層喜ばれ

た。この方は「望郷の星」の現地ロケに立ち会っておられ、私たちを二人の旧居に案内してくれた。

タクシーで深い山の中を長時間走り、頼家橋の「重慶郭沫若旧居国民政府軍事委员会政治部第三厅」跡に着いた。ここは郭沫若をはじめ文化人や政治家が住んでいたところで、テル夫妻が住んでいたとされる部屋に案内された。かなり大きな部屋であったが、廃屋となっていた。ゴミだらけの廃虚に曉子さんは一人立って涙ぐんだ。「母テルはこの地で星を生み育てながら文章を書いたのだろう」と感慨深げだった。

「夫と共に、正義と平和を愛したテルは、あの悲惨な嵐の起った地で生き、そして短い生涯の幕を閉じ、流星のごとく消えました。だが、彼らの足音が未だその地の人々の心の中に、静でありながら響きわたり続いています。私は彼らの子どもであることを誇りに思っています。また、彼らの子どもらしく生きてきたことも……」。旅行の後、曉子さんが書いた文章の一節である。

曉子さんは、私たちと一緒に平和運動にも取り組んでいる。特に中国からの留学生や中国残留孤児には援助の手をさしのべている。中国政府に育てられた曉子さんだが、日本と中国の友好を強く願う立場から時には中国政府にも厳しい批判をする。

今年には敗戦六〇年。中国で反日デモなどが起こるなど、日中関係は厳しい状況にある。中国では、抗日六〇年記念のイベントが企画されている。暁子さんの話によると、中国中央テレビがこの夏に四名の歴史上の人物をテーマにした作品を制作する。その一人がテルだそうである。

また、来る八月一日〜一七日に中国郭沫若研究会・郭沫若紀念館と青島大学とが主催して、青島で「郭沫若と中国知識人・文化人たちの抗日戦争・民族解放戦争においての文化選択」というシンポジウムを開催する。暁子さんもこれに招かれており、テルを支えた郭沫若の遺児とテルの遺児が初めて出会うことになりそう。日本代表の坂井弁護士が「長谷川テルと郭沫若先生とその頃の旧居跡を訪ねる——日本におけるテルの研究の状況も加えて——」のテーマで講演する。私たちテル研究グループも青島に行くことにしている。

昨年からは、日本でも東京大学の高橋哲哉教授が、憲法集会での結びの言葉にテルの文章を引用するようになった。名古屋では朗読劇「売国奴と呼ばれても——長谷川テルの青春」が上演された。さる六月の関西エスプレント大会では、私がテルについて話した。来る一〇月の日本エスプレント大会では、女性講談師・宝井琴桜がテル

を語る。

最近発行された日本・中国・韓国三国共同編集の東アジアの近現代史『未来をひらく歴史』に長谷川テル・劉仁夫妻の写真と文章が掲載された。

短い命を反戦平和をささげ、広大な中国大陸を夫とともに駆け巡り、反戦の文章を残したテル。彼女を突き動かしていたものは何か。幼い頃、父から受けた男女差別。奈良女高師時代の逮捕経験。世界語エスプレントによって得た人間平等の思想。そして、出会った夫劉仁との同志愛。それらが原点となって、日本の中国侵略に反対しなくてはという思いにかられ、反戦放送に携わる決意に至ったのだろう。

日本は経済大国になったが、アジアを侵略した歴史を忘れてしまった。そればかりか、憲法九条を変えようとしている。テル夫妻が存命であればどう行動するであろうか。憲法九条を守ることが、テル夫妻の思想を受け継ぐことになるのではないか。

私も一人の日本人として何をすればいいか考える。テルの生き方を多くの日本人に伝えることが私の使命ではないかと思うこのごろだ。

（さわだ かずこ・夕陽丘女性史グループ）

肉声とペンで反戦訴え続けた

テルの足跡 平和の礎に

日中戦争の直前に中国へ渡り、戦争中、肉声とペンで反戦平和を訴え続けた日本人女性がいた。長谷川テルという。「『売国奴』と呼ばれても訴えをやめなかった彼女の生き方を通して、平和や日中友好について考えてほしい」。日中開戦から70年を迎えたこの夏、大阪の市民グループがテルの足跡を一冊の本「長谷川テル」にまとめた。(深松真司)

大阪の市民グループが本出版

長谷川テルは1912年に りません

山梨県で生まれた。奈良女子高等師範学校(現・奈良女子大)在学中、世界平和を基調とする国際語「エスペラント」を学び、反戦思想に目覚めた。その後、中国人留学生

と呼ばれても



日活動家らの支援を受けながら、日本の侵略戦争を糾弾する反戦放送や文章を発信し続けた。が、終戦後の47年、手術の感染症が原因で、祖国・日本に戻ることもなく中国・佳木斯で亡くなった。34歳だった。

本の出版は、こうしたテルの生き方や思いに共感し、テルの生涯を描いた日中合作ド

追った。

中心となった平和・女性問題研究グループ主宰の澤田和子さんが今年初めに倒れ、7月に亡くなった。一時完成が危ぶまれたが、次男の和也さん(41)が遺志を継いで原稿をまとめた。

和也さんは「テルの研究をライフワークにしていた母が手にすることはできなかったが、日中開戦70年という節目の年に出版できてよかった」と話す。

本には、反戦を訴えたテルの生い立ちや活動の記録、随想文、作品リスト、テルを支えた夫劉仁の人物像、日中戦争時の時代背景などがつづられてい。テルの長女曉子さんも、母への思いを寄せている。

執筆者の一人、坂井尚美弁護士(74)は「日本が中国へ侵略したことが、やがて太平洋戦争の開戦につながっていっ



日中戦争下の中国で日本兵に反戦を訴えた長谷川テルと、夫の劉仁＝「長谷川テル」から



「長谷川テル」を執筆した坂井尚美弁護士（左）と澤田和也さん＝大阪市北区で

日中戦争中

の劉仁と結婚、37年4月に25歳で中国・上海へ渡った。直後の7月に日中戦争が開戦。翌38年以降、テルは漢口や重慶の放送局からラジオを通じて、侵略する日本軍にこう訴えたという。

「熱い血を流し間違っただけではありません。皆さんの敵は海を隔てたここにいるのではあ

「侵略するばかりか、罪のない難民の上に、この世の地獄をもたらし平然としている人たちと同じ国民に属している方が、より大きな恥」「私たちの敵はただ一つ、ファシストたちです」「平和のため人類正義のため奮い立ち」――。

テルは終戦まで、中国の抗

「売国奴」と

ラム「望郷の星」（80年）の上映会や勉強会を開いてきた大阪の市民グループが企画した。

た。その日中戦争の初めから「戦争をやめろ」と訴え、祖国・日本を愛するがゆえに強い意志で反戦を叫び続けた勇気ある女性がいいたことを知ってほしい」と話している。四六判334頁、税込み1800円。問い合わせは、せせらぎ出版（06・63357・6916）へ。

〔編集後記〕



◆一冊をまるごと追悼号にした〈あこらメイト追悼号〉を出すのは、これ度目。

第一回、白井博子さん、第二回、松井やよりさん、そして今度……。

いつも、〈あこら〉にとつてだけでなく、日本にとつて、世界にとつて、ほんとうに大切な方が旅立たれたことに、改めて胸が痛みます。

澤田さんの広い交友関係を映して、この号には、今まででいちばん多くの追悼文が寄せられ、その一つひとつを読むたびに、また涙を流しました。

でも、白井さんの時にも、やよりさんの時にも感じたことですが、亡くなられたことによって、一粒の麦は、そ

の千倍にも万倍にもなつて、世界の人びとに、力と癒しを与えてくださる。

今ごろは遠く高い空の上から、和子さんは私たちの愚行も善行も、ニコニコ笑つて見ていらつしやるのでしよう。

たくさんの方の、深い思いに包まれて、この号の編集は、格別重いものになりましたが、そのぶん、長い旅路を共にしたような充実感に包まれました。

改めて和子さんに、「ありがとう」を申し上げ、あなたの友人にふさわしい生き方をしたいと、痛切に思っています。

(千)

◆澤田さんに寄せられた多くの方の文章をよませていただいて、改めて彼女の大きさを感じました。

知り合つて十有余年にもなるのに、ほんの一面しか知らなかった私。人なつこく、面倒見のよい典型的な大阪のおばさんという印象が強かったです。

早くに逝つてしまわれたけれど、こんなにも立派な追悼号を贈られて、冥利につきる思いをしていらつしやることでしよう。

◆澤田さんが逝つてしまわれてから、はや二か月が過ぎました。

多くの方がたから「さまざまな思い出」をお寄せいただき、いまさらながら澤田さんの人脈の豊かさ、業績のすごさに感じいています。

「偲ぶ会」までに、という限られたなかでの企画、大切な方が抜けているのでは、と心にかかりますが……。

この追悼号が、澤田さんが私たちの中に生き続けるひとつの証しになれば、と思います。

(光)

〔三二四号の編集協力者〕

荻原有希／小俣光子／斎藤千代／
斎藤 涼／澤田和也／山際美代子

〈あごら〉は、人と人が出会うひろば――

思い悩んだとき、もっと豊かに生きたいとき、流れを変えたいとき……心おきなく話し合える仲間がいる。――そんなひろばが、北海道から沖縄まで、いつのまにか広がりました。

雑誌「あごら」を軸に、よりよい自分と社会を目指すゆるやかな連帯。どの部門にも「長」は置かず、自分を変え、社会を変える――「病床からでも参加できる運動」が、モットーです。

ハガキ・FAX・メール・電話でお申し込みください。

〈BOC〉の登録もぜひ……

一九六〇年に生まれた〈BOCバンク・オブ・クリエイティビティ〉は、〈創造力の銀行〉。あなたの創造力や特技、希望の報酬をご登録ください。各国語翻訳・通訳・企画・調査・取材・編集・校正等の専門職のほか、どんな〈創造力〉でも歓迎！ ただし、半年以上〈あごら〉会員の方に限ります。

連絡先

〒160-0022 東京都新宿区新宿一-九-四 中公ビル
電話 03-3354-3941 (代表) FAX 03-3354-9014
Eメール XLV05467@nifty.com または boc@mb.infoweb.ne.jp
ホームページ <http://homepage2.nifty.com/agora1/>

あごら 314号 (10月号) ありがとう 澤田和子さん

- 編集 あごら新宿
 - 発行 2007年10月20日
 - 印刷 藤田印刷(株)
 - 発行所 BOC出版部 〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4 中公ビル3F
 - TEL 03-3354-3941(代)
 - FAX 03-3354-9014
 - E-mail XLV05467@nifty.com
 - 定価 本体1,000円+税
 - 振替 00100-0-5264 BOCあごら編集部
-



9784893061690



1920036010004

ISBN978-4-89306-169-0

C0036 ¥1000E

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

定価 本体1,000円+税

企画・編集・翻訳…
何でもご相談ください

創業1960年 —
女性専門職集団
BOC

各種プランニング
各種調査

取材・撮影・編集
校正・デザイン・レイアウト
各国語翻訳その他

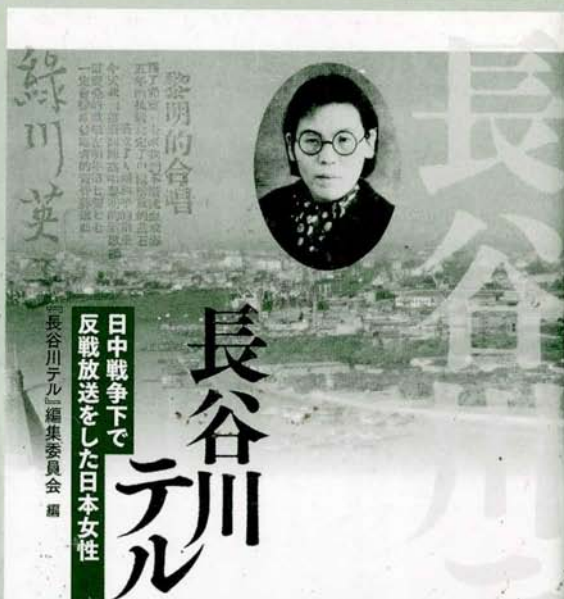
男女共同参画の
BOCシニアも
スタートしました。

ベテランの知恵と経験を
お役立てください。

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

☎03-3354-3941 FAX3354-9014

E-mail XLV05467@nifty.com



『長谷川テル』から、
平和、勇気、信念を学びました。
遺児、長谷川暁子さんから、
愛、絆、希望を学びました。

(旧中金倉家「長谷川テル」位を元に)

せせらぎ出版

栗原小巻



澤田和子さんが、最後に
精魂こめておつくりになった
ご本です。

長谷川テルについての集大成。
ぜひ、読んでください。

四六判 334ページ 1800円

せせらぎ出版刊

06・6357・6918